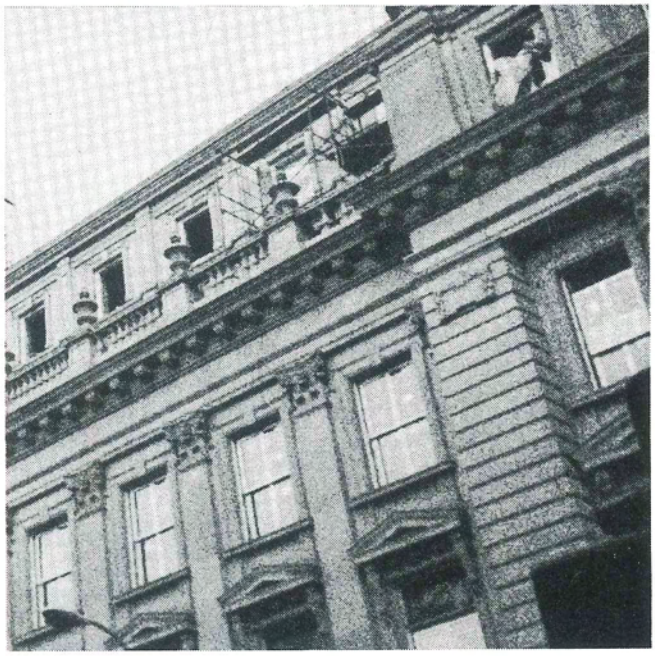
ARCHITECT

Japan Institute of Architects

1989 3 —MAR



CONTENTS

●「人間」を担保にせよ　月尾嘉男氏に聞く
●きびしい建築家への眼　玉田　冨雄先生訪問
●都市への提言　路地のある街　北原　理雄
●職業としての建築⑤　瀬口　哲夫
ギリシア・ローマ時代の建築家を下敷きにしたルネサンス期の建築家像
●河清百年「デザイン博に携わって」　林　英光
●都市デザインセミナー第一回運営会議
統一テーマ「純粋都市の検証」

JIA 社団法人新日本建築家協会東海・北陸支部愛知部会

No. 6
ARCHITECT
89 — 3 ■ MARCH

CONTENTS
目次

Essay
会員ずいひつ・コンクリート ―― 2
市川三千男・川島　守・大塚　勝久・桑子　隆信
都市デザインセミナー第一回運営会議
統一テーマ「純粋都市の検証」 ―― 4
Interview
「人間」を担保にせよ ―― 6
月尾嘉男氏（名古屋大学建築学科教授）に聞く
Suggestion
都市への提言
路地のある街 ―― 北原　理雄 ―― 13
History
職業としての建築⑤
ギリシア・ローマ時代の建築家を下敷きにした
ルネサンス期の建築家像 ―― 瀬口　哲夫 ―― 17
Urban design
河清百年「デザイン博に携わって」 ―― 林　英光 ―― 18
構造家懇談会について ―― 豊島　祐昌（構造家懇談会中部支部事務局） ―― 20
専門分野の役割に理解を求める ―― 愛知県設備設計監理協会 ―― 21
Predecessor
玉田 冨雄先生訪問
きびしい建築家への眼 ―― 14
追悼　川本　昌光氏（篠田川口建築事務所） ―― 23
Woman
自然体でありつづける ―― 木和田悦代 ―― 12
Watching
中村遊廓ウォッチング ―― 研修委員会 ―― 16
Art
自己主張する雛たち ―― 神谷あかね ―― 22
News
賛助会員の製品紹介 ―― 松下電工㈱ ―― 23
Book
新刊案内 ―― 24

建　築　歳　時　記

1475年3月6日

偉大な芸術家ミケルァンヂェロがフィレンツェ自由都市共和制の市民の子として生まれた日である。

「ミケルァンヂェロは、いま生きている。うたがうひとは“ダヴィデ”を見よ。ダヴィデは少年である。かれが怪物をたおす決心をつげたとき、ひとびとはかれを止めた。が、確信をもってかれは、一本の石投げの石をもっただけで、ゴリアにむかって行った。そして少年ダヴィデはついに怪物ゴリアを倒した。――

ミケルァンヂェロの“ダヴィデ”はいまルネサンスの自由都市国家フィレンツェの中央広場に、その議会の正面の階段をまもって立っている。身には一糸つけず、まっしろの大理石のまっぱだかである。」　　羽仁五郎著「ミケルァンヂェロ」より

1564年2月18日、ミケルァンヂェロはローマにて90歳の生涯を終えた。

1834年3月24日

イギリスの詩人、工芸家、社会改革家ウイリアム・モリスは1834年3月に生まれている。

建築家を志し、多くの評論を残している。今日のデザイナーといわれる人々のすべての領域にわたる実作者であり、はかりしれない影響を与えている。

1896年10月3日過労でハマミスで死去している。

会員ずいひつ
コンクリート

私の好きな構造体

市川三千男

私はまさに化学と物理学との賜物といえる鉄筋コンクリート造が好きです。

好きな理由は三つあります。その第一は、「人」という文字がお互いに寄り掛かり支えあって出来ているように、鉄筋とコンクリートという異質の材料がそれぞれの長所短所をカバーしあって一体の造形を有しているところです。また、その両者がうまくバランスを保っていなければ満足する作品にはなり得ません。しかし、ＯＡ化の進歩と共にコンクリートの品質管理が良くなっているので、以前ほどは神経を使わずに済むようになってきました。また、鉄筋もより強度のものが出来てきていますので随分助かります。

ときどき、我々建築屋と土木屋との鉄筋コンクリートに対する感覚の違いに驚かされます。もちろん図面の書き方も違えば、コンクリートのスランプにしても随分差があります。一度あの土木でよく使われるスランプ５～８程度のコンクリートで打つ建物に挑戦してみたい気がします。

さて好きな理由の第二は、型枠さえ組むことが出来れば非常に自由な造形が得られるという楽しみがあることです。直線、曲線、放物線、キャンテ、シェル、ｅｔｃ……。

しかし、最近は労務不足で現場では四苦八苦の状況であります。非常に残念です。

第三の理由は、構造解析が確立されていて現実と差異がなく、また仕上げ（柱、壁、天井、床等）と構造体とが密着した状態で施工されるので、施工性の面でも納まりが良いからです。場合によっては、構造体イコール仕上げとして、打ち放し仕上げも可能であります。一時このコンクリート打ち放しが持てはやされた時期がありました。しかし、私はこの打ち放しがあまり好きではありません。打ち放しの建物でいいなと思うものが少ないように感じるからです。（私の主観ですが）たとえば、関西のある大学で見ました打ち放しの安売りのような建物群などは、どうかと思いました。コンクリートの素肌の色は全面に出されるとどうも痛々しく感じます。もちろん中性化も速いでしょう。やはり、風雨に耐えるための衣服をまとい、ファッションなど表面的なデザインも考えたいものだと思います。たとえば、和服の女性のえり足が男心を刺激するように、ミニスカートからスラリとのびた足にみとれるように、そんな使い方をした「打ち放し」が好きです。東京の文化会館はいいですね。特に屋内の柱の打ち放しは好きです。青少年公園の打ち放しと原色の塗装とのバランスもなかなかです。ボストンのハーバード大学にあるハートセンターは全面それで身を固めてありますが、造形のハデさと材質のジミさとのバランスが良く、さすがだなあと感じました。

ますます、「私の好きな構造体」を駆使し、より機能的な、より美的な作品を造りたいと意欲が沸いてきます。

（㈱市川三千男建築設計事務所主宰）

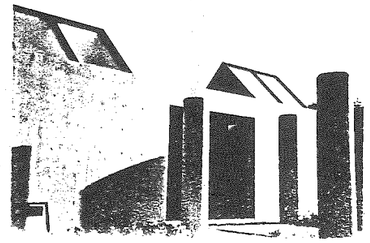
たかがコンクリート
されどコンクリート

川島　守

最近、車で街の中を走っていると、やたらとコンクリートの打ち放しの建物が目につくようになりました。私自身がコンクリートの打ち放しの住宅をやっているせいもあるのかもしれませんが、特別に意識しなくても、目の中に容赦なく飛び込んでくるのです。

確かに建築雑誌をみていてもコンクリートの打ち放しの住宅は最近、多くなっています。若い建築家にとっては一度は施主を口説き落として、コンクリート打ち放しの住宅を造ってみたいと思っているようですし、そんな建築を造っている人達の気持ちが写し出されているのかもしれません。

コンクリート打ち放しの魅力を一言で言うことは大変むずかしいですが、一度その魅力にとりつかれるとなかなか抜け出るには、容易ではないみたいです。コンクリートというものが塗装合板による打ち放しで、木コンの位置までが、規則正しく配列され、パネルの



目違いもなく、平滑に、精度と美しさで、その肌理をかたちづくるそれには確かな施工が要求されるわけですが、よいコンクリートのテクスチュアを表現するには施主と建築家と施工者が三位一体で取り組まねばならないでしょうし、それが条件でもあるわけです。

コンクリートという可塑性に満ちた材料、それを造形という形に封じ込める、封じ込められたコンクリートの表情は、天候、時間に応じて、さまざまに変化し、重々しくも軽やかにも、そして荒々しくも、滑らかにもなる。このように千変万化の様相はコンクリートという素材だから、みせることができるのでしょうし、そこには多くの変化を容易に受け入れる可能性もでてくるわけです。

ある一面、ファッション化してしまっているという声も聞かないわけではありません。それも認めなくてはならないでしょうが、昨今、さまざまな建材がメーカーによって開発され使われています。特に去年から今年にかけての建築ブームとやらで、外壁をコストの高い材料で仕上げる現場を多く見かけます。そういった使われ方に何か物足りなさを感じるのは、私だけでしょうか。私達が日常生活で忘れかけている普遍的な何かを、コンクリートのかもし出す表情が人間の生き方まで問いかけるような、生々しさをもって私達に教えてくれるような気がしてならないのです。

これからコンクリートとのつき合いも、今まで以上に多くなっていくと思いますが、コンクリートの持っている感性と語り合いながら、建築家である前に、人間としてどうなのかということを真剣に考えていきたいものです。

（川島建築設計事務所主宰）

さまざまな表情

大塚勝久

よく都会を表してアスファルトとコンクリートのジャングルと言われた時期があったように思う。都会の象徴的顔の主要な構成因子とも言えるこのコンクリート……お化粧をしているものやら、素肌のままのものやあばた面のものまで千差万別。また打ち上がったばかりの生き生きとしたものから、歳月が経って真黒になっているものまで、同じコンクリートながら経過年数の違いやその置かれた環境の違いによっても様々な表情を楽しませてくれている。

近代建築にこのコンクリートが取り入れられてから実に長い年月が経っているわけだが、私にとってもこのコンクリートとのお付き合いは、実に古くからまた長きにわたっている。小学校５年生の頃まで名古屋駅近くで育った私にとっては、かなり幼少の頃からごく身近にコンクリートに慣れ親しんできたとも言える。今は懐かしい路地に釘とおはじきで陣取りをしていたその遊び場所が、ある日突然コンクリートに覆われてしまい、さっそく釘をチョークに代えて同じ遊びをしたり、またコンクリートの壁面にボールをぶつけてみたりで、遊び相手としてのコンクリートとのお付き合いもあった。また、当時住宅では土間玄関の多かった時分、私の育った家の玄関は早くからコンクリート土間がしてあったように記憶している。こういった環境で育った私にとって、コンクリートという素材は、冷たいというよりは何か暖かな感触すらしてくるのは、ごく自然なことなのかもしれない。そんな私であるので、設計でコンクリートを使用する場合、単なる建築材料という扱いにはどうしても徹しきれない部分がある。いつのまにかコンクリートのさまざまな表情の抽出に神経が集中してしまっていくのである。ちょうど、同じ繊維が織り方ひとつでさまざまな質感を呈しているように、そんな思いでコンクリートに愛着をもって使い続けている。

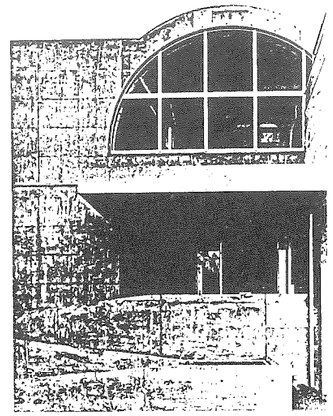
私自身はコンクリート打ち放しの家に特に住みたいという願望をもっているわけではないが、現実に打ち放しの内部仕上げのお宅に何の抵抗もなくお住まいの方々は、きっと私と同様に、コンクリートにひとかたならぬ愛着を持っておられることなのだろう。あたかも木の感触に接しているかのように……。

（久里屋設計主宰）

新たな挑戦

桑子隆信

建築を質・量ともに大きく変貌させ、発展させる主役の一翼を担ってきたコンクリートは、同時期に急成長した建築産業の工業化により圧倒的な種類と数の工業生産部品が建築の中にも溢れている下で、比較的原料に近く非工業化的要素を残した状態で使用できる数少ない材料のひとつになっている。本来、優



れた構造的特性を第一とするコンクリートが、一面で造形上の自由さ、現場加工の手軽さをみこまれ、建築生産の工業化に対置する建築材料としての役割を背負っている。（主に構造材料として多様な用途に応じた材料特性を高めているコンクリートにとっては本位でないかもしれない。）

ボリューム感と型枠の表皮をコピーした素材感の強い肌合いを武器（といっても決して優れた武器とはいえない）にし、そのディテールは、情熱的な建築家たちの手によって相当なエネルギーが注がれ、かなりの完成度を見せている。造形としての鮮度も高く、緊張感に溢れるフォルムは、建築としての地位を一定に認知させている。

ただ、他の材料を極力排し、また支配的な「かくし」のディテールは、徹底されるほど、磨き上げられるほどに閉鎖性、排他性をも強めている。それは必ずしも「常に建築のあり様をはかる不動のものさし」である人の肌に充分なじんでいるとは言えない。生物材料とは異なる単一材料で表現する宿命でもある。

もし、建築家が自己表現のみに建築の価値を限定してしまうならば、人間のためにある建築が虚構の中をさまよい奇妙な所へたどりついてしまおうが、新たな挑戦へのとっかかりでもあり得る。

うわべだけのとりつくろいを否定し、立ちはだかるような限界性に挑戦することが、建築を進化させるエネルギーを着実に蓄える力ともなる。混沌とし続ける巨大な潮流の中で、新しいものが創造されてくる摸索の胎動となりえよう。

（㈱連空間設計）

都市デザインセミナー第1回運営会議

統一テーマ「純粋都市の検証」

名古屋市とＪＩＡの共催による都市デザインセミナーの第一回運営会議が、２月８日（水）名古屋市役所の第一会議室において開かれた。

この都市デザインセミナーは、名古屋市制 100周年を記念し、21世紀に向けての指針となる世界デザイン博覧会のファイナルイベントとして行われるもの。

会場には、西尾武喜名古屋市長をはじめ、名古屋市、県、建設省、ＪＩＡの各関係者がそろい、ビッグイベントの正式なスタートとなった。

運営会議は、定刻通り午前10時半に西尾武喜名古屋市長、北代禮一郎ＪＩＡ会長の挨拶で始まり、事務局から都市デザインセミナーの経過および規約を資料に基づいて簡単に説明。ついで都市デザインセミナーの会長に選ばれた大沢正隆名古屋市助役の挨拶があり、運営会議の議案を井尻ＪＩＡ事務局長より説明に入った。

議案は、第一号（事業企画）、第二号（事業予算）、第三号（事業スケジュール）の３議案で構成され、それぞれの議案を大まかな項目に打ち出したもので、説明をおって議案ごとの内容に対する意見や質問を求め、３議案とも議案通り決定された。

その後、役員の任命や役員名簿、組織の説明などがあり、第一回運営会議を終了した。

＜第１号議案＞

都市デザインセミナー事業計画案

Ⅰ．統一テーマ『純粋都市の検証』

現代都市の画一化、均質化が、より進行した高度情報化社会の様態を「純粋都市」の時代と位置づけ、このテーマのもとに「技術と情報」「都市と環境」「自然と人間」のデザインをグローバルに検証する。

Ⅱ．直接事業（於名古屋ヒルトンインターナショナル）

１．基調講演　「21世紀の都市デザイン」
講師：丹下健三（建築家）
日時：11月16日　11時～12時

２．講演会
総合司会：牛山　勉（名城大学助教授）
①「都市と情報のデザイン」
講師：ポール・ヴィリリオ（パリ建築大学教授）
コメンテーター：浅田　彰（京都大学人文科学研究所助手）
日時：11月16日　13時30分～15時
②「都市と環境のデザイン」
講師：クリストファ・アレグザンダー（カリフォルニア大学教授）
コメンテーター：三宅理一（芝浦工業大学助教授）
日時：11月16日　15時30分～17時
③「都市と人間のデザイン」
講師：梅原　猛（国際日本文化研究センター所長）
コメンテーター：井上章一（国際日本文化研究センター助教授）
日時：11月17日　10時～12時

３．シンポジウム「純粋都市の方位を探る」
司会：藤川壽男（建築家）
①第１部　「コメンテーターの報告と問題提起」
日時：11月17日　13時30分～15時
出席者：浅田　彰
三宅理一
井上章一
月尾嘉男（名古屋大学教授）
若山　滋（名古屋工業大学助教授）
北原理雄（三重大学助教授）
②第２部「パネルディスカッション」
日時：11月17日　16時～18時
出席者：浅田　彰・三宅理一・井上章一
月尾嘉男・若山　滋・北原理雄

なお、第２部の開幕にあたり、名古屋市長より「名古屋の都市デザイン」についての提言をいただく。

都市デザインセミナー第１回運営会議

Ⅲ．関連事業

１．模型展「都市デザインの潮流」開催
第１期日時：11月14日（火）～19日（日）
場所：電気文化会館５階ギャラリー東・西
第２期日時(予定)：11月21日(火)～26日(日)
場所：世界デザイン博名古屋港会場ポートビル

２．連続セミナー（於朝日ホール）
第１回「都市と情報のデザイン」
日時：９月29日（金）
講師：浅田　彰
月尾嘉男
粉川哲夫（和光大学講師）
第２回「都市と環境のデザイン」
日時：10月13日（金）
講師：三宅理一
北原理雄
柏木　博（東京造形大学助教授）
第３回「都市と人間のデザイン」
日時：10月27日（金）
講師：井上章一
若山　滋
宇波　彰（哲学者）

３．広報紙『都市とデザイン』刊行
４．『都市デザインセミナー』ポスター制作
５．『都市デザインセミナー』ＤＭ制作
６．『都市デザインセミナー』リーフレット制作
７．新聞メディアのパブリシティ及び電波等によるＰＲ
８．『都市とデザイン（名古屋宣言）』の刊行

以上

名古屋の都市デザインにご助言を

西尾武喜名古屋市長

今年はデザインイヤーとして、全国的なデザインシンポジウムが開催されることになっておりますが、名古屋市としても市制１００年の大きな節目としての記念事業の意味をあわせて、デザイン博覧会を７月15日から11月26日まで、また世界デザイン会議を10月18日から23日まで開くことになっております。

このセミナーはちょうどデ博の終わり頃になるもので、名古屋市における各種行事の重要な締めくくりのイベントと理解をしております。このセミナーを通じて21世紀に向けての感性豊かな街づくりの指針となるようなものを期待しております。

ＪＩＡにおかれても、この都市デザインセミナーを全国大会のメーンイベントと位置づけて、全国規模で気鋭の建築家が本市にお集まりいただき、内外からの都市デザインセミナーということでいろいろな議論を展開していただけるものと思うわけで、名古屋市としても大変光栄に思っておる次第です。このセミナーを通じて、名古屋市の都市デザインについて多大のご助言等をいただければ、なお名古屋市として幸いと思うわけであります。

本日は事業計画、予算等を審議していただくわけですが、都市デザインセミナーのテーマである21世紀に向けての都市建築デザインの探究に向けてのより意義ある、より質の高いものにしていただくよう成功を心から祈るものであります。

（要旨）

＜第２号議案＞

事業予算案　(円)

支出の部		収入の部	
支出科目		収入科目	
1.直接事業費	44,500,000	負担金等	30,000,000
2.間接事業費	7,000,000		
3.委員会費	2,840,000	1.事業収入	15,000,000
4.事務局費	4,500,000	2.広告協賛費	15,000,000
5.予備費	1,160,000		
計	60,000,000	計	60,000,000

都市デザインセミナー運営会議

顧　問　西尾　武喜　（名古屋市長）
〃　丹下　健三　（ＪＩＡ前会長）
会　長　大澤　正隆　（名古屋市助役）
副会長　北代禮一郎　（ＪＩＡ会長）
委　員　内井　昭蔵　（ＪＩＡ副会長）
〃　林　昌二　（ＪＩＡ副会長）
〃　鬼頭　梓　（ＪＩＡ副会長）
〃　坂内　幾男　（ＪＩＡ副会長）
〃　○中田　亨　（ＪＩＡ専務理事）
〃　税田　公道　（ＪＩＡ東海北陸支部長）
〃　高木　啓輔　（建設省中部地方建設局企画部長）
〃　浦上　和彦　（愛知県建築部長）
〃　山田　昭夫　（名古屋市総務局長）
〃　稲垣　薫　（名古屋市経済局長）
〃　中川　健　（名古屋市計画局長）
〃　河本　毅一　（名古屋市土木局長）
〃　○杉山　文雄　（名古屋市建築局長）
監　事　竹内　正　（名古屋市財政局長）
〃　横井　良一　（ＪＩＡ東海北陸支部監事）

都市デザインセミナー実行委員会

委員長　税田　公道　（ＪＩＡ東海北陸支部長）
副委員長　馬場　富雄　（名古屋市建築局指導部長）
委　員　出江　寛　（ＪＩＡ理事）
〃　八木利喜彌　（ＪＩＡ東海北陸副支部長）
〃　栢本　良三　（　〃　）
〃　田辺　尚美　（　〃　）
〃　森永　俊男　（　〃　）
〃　木村　慶一　（　〃　）
〃　山下　憲三　（　〃　）
〃　五十嵐和夫　（　〃　）
〃　小倉　一夫　（㈲ウルファン代表取締役）
〃　北村　孝昭　（ＪＩＡ・ＮＥＷＳ広告担当）
〃　川合　哲視　（名古屋市総務局企画部企画課主幹）
〃　太田　重雄　（　〃　経済局企画調整主幹）
〃　越野良一路　（　〃　計画局都市計画部都市計画課長）
〃　山口　守彦　（　〃　計画局都市計画部都市景観室長）
〃　加藤　雄也　（　〃　土木局企画調整主幹）
〃　三島　直記　（　〃　建築局総務課長）
〃　加藤　秀臣　（　〃　建築局企画調整主幹）
〃　松尾　博雄　（　〃　建築局指導部指導課長）
〃　佐藤　雅俊　（　〃　建築局住宅部住宅企画課長）
〃　河辺　信行　（　〃　建築局営繕部営繕課長）
運営会議事務局長　井尻　寛　（ＪＩＡ事務局長）
〃　次長　内田　其良　（ＪＩＡ事務局次長）
〃　事務長　矢島　敏男　（ＪＩＡ支部事務長）

「人間」を担保にせよ

このままでは建築界・建設業界は 長期的に見て危ない

月尾嘉男さんは建築学科の教授であるにもかかわらず、つねに建築生産を他産業との関わりから醒めた眼で見てきている。
今回のインタビューも建築と建築家を第三者の眼で客観的にとらえアドバイスしてもらった。

名古屋大学建築学科教授

月 尾 嘉 男 氏に聞く

インタビュアー　鋤納忠治

他産業の比較から見る

――このインタビューシリーズは、建築人以外の識者から、建築と建築家の職能について語っていただくという趣旨ではじめたのですが、月尾先生は、その意味では建築の人でありながら、いつも建築を外からというか、建築を一回りか二回りくらい大きくした視座で建築をとらえておられるように拝察しています。したがって、われわれ建築にどっぷりつかっている者に対して、違った角度から建築についてのお話がうかがえるのではないかということを期待して、お願いしたわけです。
そこで、まずは建築設計界というか、新建築家協会をどのようにとらえておられるか、ということからお考えをお聞かせいただきたいと思います。

月尾　建築の外にいるというのは痛烈ですね。（笑い）本当は建築家になりたかったのですが、才能がないと早々にあきらめて建築をやめたわけです。それでいま適切にいっていただいたように少し離れたところから建築界、建設業界というのを見るようになりました。
離れたところという意味は他の産業分野と比較しながら建築家とか建設業を見てきたということですが、そうしますと、建築界というのはちょっと特殊すぎるという気がするわけです。
建築というのは、一番古い職業とか産業と言われていますね。農業はそれ以前からありますが、農業以降の産業としては恐らく一番古い。最古の建築は紀元前 5,000年と言われていますから 7,000年くらいの歴史があるわけです。いろいろな産業が栄枯盛衰したきた中でよくここまでもったという気もしますが、これからも絶対続くかというのは保証できない。もちろん建物をつくることは、これからも続くのですが、今の建築家や建設業がそのままやっていけるかということになると残念ながら保証できないという気がします。
一つには建築家が急速に進んでいく技術についてあまりにも楽観的すぎるということです。たとえば情報技術は、すごい勢いで進歩しており、あらゆるものがこの技術を取り入れていかないと成り立たない社会になりつつあります。ところがいまの建築家で情報技術を駆使した設計をできる人はどれくらいいるか、あるいはいまの大学教育の中で、そういう技術教育をどの程度しているかというと、ゼロに近い状況です。

――他の分野にくらべますとね。

月尾　そういうことが社会で非常に重要になってきたとき、建築家といわれる人が対応できないとすると、分野の違うエレクトロニクスとかコンピューターの専門の人が建築をやってやろうかと思う可能性も十分にあるわけです。現実にトロンというコンピューターを開発している坂村健という東大の助教授が電脳住宅というコンピューター能力を駆使した建物を自分で設計しているわけです。
彼は理学部のコンピューター・サイエンスの専門家です。このようなことを私が切実に感じたのはインテリジェント・ビルディングがブームになってきたときです。通信技術とかＯＡ技術とか制御技術をふんだんに使うことによって、従来の建物より付加価値の高い建物がインテリジェント・ビルディングですが、これは今までのように建築家がのんびりしていたのではできません。

それからサービス業などを見ますと、融業化とか業際志向といわれるように、いろいろな業種をまぜあわせて新しいビジネスをつくるということが進行しています。ところが建築家は与えられた土地に与えられた目的の建物を設計することだけをしている。他の業界では自ら新しいビジネスをつくってマーケット自身も自分でつくっていく。たとえば商社などは新しい建築のマーケットをどんどんつくり出しています。そうすると建築家の相対的な地位というのは落ちていき、商社に使われる立場になってしまう。これを逆転していかなければいけないという気がするのです。
そのためには、建築家がプロジェクトを自分でつくることが必要になると思います。別の言葉で言えば川上へさかのぼっていくことが必要になるのではないでしょうか。自分の土地でなくても、ある土地にこういう空間をつくることが必要だと、土地をもっている人に訴えるとか、公共的な土地であれば市役所にそれを提案するとか、川上の方へさかのぼっていかなければ取り残される恐れがあると思います。

川下にも仕事はある

逆に川下もあるわけです。たとえば、ホテルの設計を依頼されると、工事監理の責任が終わると引渡して仕事が終了するというのがいまの建築家の立場です。ところが建物を何十年間使うという観点からしますと、ほんのわずかの部分しか建築家は建物に関係していません。オフィスビルの場合、企画から設計・施工がおこなわれ、その後何十年間も建物を使うということで全費用を合計しますと設計と施工の費用は15％にしかならないのです。85％は建物が竣工してからあとの過程で使われるお金です。考え方によっては建築家や建設業はずいぶん謙虚だという気がしますね。85％、つまり６倍近くも稼げるのに最初の15％のところだけ稼いでもう終わりということです。もっと運営にまで積極的に出ていくと非常に大きなマーケットを対象にすることになるわけです。
最近は少しづつそういう人も出て来ました。ジョン・ポートマンは自分でホテルのプロジェクトをつくって自分で設計をして、ホテル経営に自らも参加するという建築家です。これからの発展を考えると川上という方向と川下という方向へ建築家も出ていくことが必要だという気がします。

――月尾先生は、かつて学生に「建築家に明日はない」ということを言われたと洩れうけたまわっていますけれど、それはそういう意味あいのことなんですか――。

月尾　今のままでは明日はないと言ったわけです。別に建築設計や建設業がなくなるわけではなくて、おそらく量的にはもっと増えてくると思います。要はいままでの建築の教育体制から出て来た人が、建築の分野の中心になれないかもわからないと言ったわけです。

リスクを負わない建築家

――元来建築家もそうですけれど建設業に携わっている人はおしなべて、受け身の形でして、こういう条件で何かを考えてこいと言われると実にいい回答を出してきますけれど、自分から企画立案して何かを実現させることには慣らされていないのです。したがって企画者というかオーナーの立場に立ち得ないというのが宿命的にあるように思っています。

月尾　他の業種と一番違うことは何かと言うと、リスクを背負って仕事をするということがないのが建築家なり建設業だと思うのです。たとえば家庭電化製品を作る会社は売れるか売れないかわからないが、自分でマーケットを開拓しながら大量の投資をするわけです。売れなければ失敗で倒産してしまうが、売れたら非常に儲かる。そうすると市場を自らつくる努力もするし調査も徹底してやる。ところが設計事務所も建設会社も基本的にリスクは施主によって保護され安全な環境の中で仕事をしています。世の中の仕事でリスクをおってない仕事はないわけです。ここへレストランをつくったら客が来るかどうかよくわからない。だが経営者は一生懸命に予測をして広告を出して努力をします。それではそのレストランを設計する建築家はどうかというと設計料をもらって仕事をする。リスクは全然ない。

人間を一番理解する

――先回の横越英一先生の話でもね。そういう職能は大きな会社というか社会の中に組みこまれていくというようなお話なんですけど、共通したところがあるようにもうかがえますけれど。

月尾　私は悲観的に見ているわけではなくて、建築家がこれから力を発揮する分野は、この道しかないと思っているのです。人間と空間の関係をよく理解したコーディネーターになるというのが、ＪＩＡのような独立した建築家の集団としてこれから発展できる道だと思っているわけです。どういうことかというと、例えばインテリジェントビルディングは各種の技術分野の人と協力して一つの空間を作るということになりますね。建築家はまとめるということについてはトレーニングされているわけですが、そのよりどころがないと弱い。通信技術者は通信という技術をよりどころにしてまとめようとする。コンピューター技術者はコンピューターの技術をよりどころにまとめる。建築家も入って誰がまとめるかということになると主導権争いになってくる。その時に『人間』をよく理解している人がまとめるというのが一番強いだろうと思います。
大部分の空間は人間が入って使う。その時に人間の行動とか、心理とか、生理とかを一番よく理解している人がまとめる立場で発言すればこれは一番強いわけです。
通信技術者が「こういう通信技術を入れるといい」と言った時に建築家が「いやそういう技術では人間が使わない」といったとしますとそれで決まりです。人間が何を必要としているかとか、人間はどう使いたいかということをよく理解してそういう協力関係の中で発言していけば、一番強い発言力になるというのが私の理解です。そういう意味では先ほどから言っている通信技術とかコンピューター

技術とかいろいろな先端技術を理解することはもちろん必修条件だと思います。しかし、それは必ずしもエキスパートにはならなくてもいい、だが何のエキスパートでなければいけないかというと人間についてのエキスパートでなければならない。人間がそんな空間ではうまく働けないとか、うまく生活できないと言えば、これはもう圧倒的に発言力が強くなると思います。

――一番知ってないんじゃないかなあ。

月尾　そうではないと思いますけれどね。

――現実的にはすぐお金がどうだ、形がどうだ、経済効率がどうだとか、そういう話になっていってしまう。

月尾　少なくとも今まではそうだと思いますね。しかし、今後は経営を勉強した人で空間のコーディネーションをしようという人が出て来ないわけではない。現実に建築家ではないけれども建物を次々に企画している浜野安宏とか北本孟というようなプロデューサーといわれる人たちがどんどん出て来ています。ああいう人たちは建築のことはそんなに知らないけれども経営のことは非常にくわしい。総合プロデューサーとして建築家を配下に使っているわけです。この状況を逆転するには何が決め手になるかというと、人間だと思うわけです。人間についてのノウハウとか知識とかを蓄えていくことが重要だと思います。

建築教育も転換する

――医者、弁護士なんていう職能も、やっぱり扱っているものは人間だということですね。

月尾　近代が生んだ三大自由業は医者と弁護士と建築家だといわれていますね。だけど建築家は医者、弁護士に比べてかつての栄光がないという感じがします。それはなぜかというと担保が悪かったからだと私は言っているのです。医者は人間の「命」を担保にして仕事をしているから素人は従わざるをえないわけです。弁護士は「罪」を担保に仕事をしている。弁護士のいう通りにしなかったら罪人になる。これもやっぱり従わざるを得ない。ところが建築家はせいぜい「空間」を担保にしているに過ぎない。空間には好き嫌いもあるし、別に従わなくてもいいのではないかということになる。

――デザインなんていうのはもっとも担保力が弱い。

月尾　そうすると、人間を担保にしたら、これは絶対強くなるはずです。例えばこんな空間にいたら病気になるとか、こんな空間にいたら会社の能率は上がりませんよと言われれば、みんなそうかと思ってその通り従う。だから、強い担保を取らないと三大自由業として出発した建築家の栄光が取り戻せないというのが僕の意見です。

いま、建築学科の教育を担当していますが、教育が特に最近、技術偏重になっていると思っています。周辺の技術が進歩していくからそれをなんとか追いかけなければならないと技術を教えるということになってきています。もちろんそれも必要ですが、人間とは何かということを研究したり、教育したりというところが弱くなっていると思います。

――特に建築の場合、技術というのは「経験の術」みたいなものですから。実際の仕事につけばすぐ覚えるようなことが多いんですからね。

月尾　例えば、環境分野の研究についていうと、しばらく前までは空調をいかに効率良く運転するかということが中心でしたが、最近の若い研究者ではどんな温度変化が人間にとって快適であるかというような研究をする人が増えてきています。

私の学生の時を考えてみるとそういうことに関係することを教わったのは体感温度ぐらいです。湿度と温度の関係で同じ温度でも冷たく感じるとか、温かく感じるとか、その程度のことしか教わっていない。もう少し広く人間に必要な環境とは何かというようなことを教えることが必要ですね。

――思いきった転換をしていかなければいけないという感じですね。教育ということに関して言えば、一般教養課程では他の芸術とか音楽とか哲学とかいろんなことをやると思うんですけれども、建築については一般教養として全然やりませんね。

月尾　そうですね。いままでは美術の一部門というような扱いですからね。たとえば美術の歴史の中の一部として建築の歴史を扱うということはあったのですが、建築だけを教養として取り上げているというのはまだないはずです。

建築家が社会の話題に

――私なんか自分の不勉強を棚に上げて、あえていったのは、一般の社会の人にもっと、建築というものの常識を一般的な教養として他の分野のものと同じくらいのレベルでかじってもらえると建築に対する考え方が変わるんじゃないかなという気がしてますけど。

月尾　それは非常に重要なことだと思います。第一に新聞記事に建築家の名前が出るようにすることです。アメリカとかヨーロッパの新聞では新しい建物が出来たという記事では最初に設計家の名前が書いてあり、それから建設した会社の名前が書いてあって、最後に施主が書いてあります。ところが日本では施主の名前しか書いてない。たまには建設会社も出資しているから書いてあるけれども設計家はまず出ることはないですね。それが、今日の日本の社会の建築とかデザインとかに対する評価だと思います。そういう意味では丹下先生や黒川紀章さん、磯崎新さんが、一般のマスコミにスターとして出て来られたことは非常に価値があると思いますね。一般の人が建築デザインをしている人間に関心を持ってくれるという点で価値があると思います。そういうことをＪＩＡがＰＲ活動していかれれば、デザインというものが実は空間をつくる中で非常に重要な活動だと社会的に認識されると思います。

――たしかに丹下さんや磯崎さんだと設計者の名前が出ますけれど、それ以外は出ないですね。

月尾　その意味では今年開催される世界デザイン博覧会は非常に価値があると思っています。例えばテープレコーダーを買う人は機能を果たせばいいと思って買っているわけです。

しかし、社会が豊かになってくると、テープレコーダーを買おうという時に同じ値段で同じ機能ならば形のいいものを買おうと思う時代になってきたわけです。それをもっと前進させて、デザインというものは実は「モノ」の価値のなかで重要な部分を占めているということを広く理解してもらうというのがデザイン博覧会の役割だと思っています。

そういう点ではデザイン博覧会が成功すれば広い意味でのデザインも普及するし、建築家の職能も高い評価に変わっていくと思いますね。

――そうですね、私は昭和40年に初めてアメリカへ行った時に、入国の際、税関吏が私の職業が「アーキテクト」と書いてあるのを見て、「サーリネンのどういう建物を知っているか」とか何とかどんどん言ってくるわけです。これは大変なことだなと思いましたけれど、確かに一般の人が非常に建築の知識を持っているのですね。

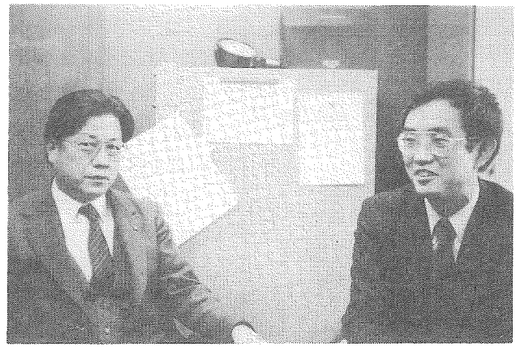
月尾　文化的な背景もあると思います。日本は木造の建物がほとんどだったから伊勢神宮で典型的にみられるように20年位で建て替えてしまう。ヨーロッパのように 500年かけて一つの作品を作るというような発想が全然ないわけです。作って20年使ったらまた壊して新しいのを作ろうということですから、人間が精魂こめてとか、一生かけて作るというような考え方が希薄だと思います。だから、誰が作ったかということをそれほど評価しないという習慣が生まれたと思います。

――昔のお城にしても神社仏閣にしても設計者というのは全然残っていませんね。

月尾　ほとんど残っていないですね。お寺などはある程度長く使おうと思って作っているけれど、基本的には誰が作ったということは意味がなかったのだと思います。

企業ブランドから個人作品へ

――工業社会の中でも一品生産とか服飾なんかの場合でも誰が作ったかわかっているものを身につけたいと思いますね。どこの工場で誰が作ったものかわからんというものよりも、価値を高く考えます。建築も経済行為としての建築だけではこれからは少しもの足りないんじゃないかというふうになってきていますね。



インタビューする鋤納忠治

月尾　そうですね。工業社会というのは少品種大量生産が基本です。なるべく種類を減らして同じものをたくさん作ると安くなって、普及する。人が「モノ」を買う時に何をよりどころにするかというとメーカーです。トヨタの自動車だとか、日立の電気冷蔵庫だとかいうように会社を信用して物を買います。ところが社会が情報社会までくると「モノ」はだんだん多品種少量生産になってゆく。さらに進めば一品種ごとに設計して作るという一品生産になってくる。その時に何をよりどころにして人は「モノ」を買うかというと、企業を信用して買うのではなく誰がそれを作ったかという人間を信用して買うということになると思います。前はブランドと言われて企業を買う形だったのですが、今はルイジコラーニという人を買うことになる。

そういう意味では建築界の展望は明るいと思います。よくわからないプレハブメーカーが作っている建物ではなくてある建築家が自分の家だけのために考えてくれた建物だということに価値を見い出すような人が増えてくると思います。建築も企業印から人間印に変わってゆくと思いますね。

文明と文化の違い

――個人住宅を設計してもらいたいという人は、ほとんどがそういう人だと思いますね。

月尾　文明と文化という言葉があります。文明はどこでも役に立つ普遍性があるものをいいますね。ところが文化はある地域とかある人間集団の固有のものを文化といっています。わかりやすい例でいうと、テレビの受像機が各家庭に普及して、どこでもテレビが見れるという状態は文明的な状態です。それは、そのテレビ受像機をアメリカへ持っていっても見れるし、フランスでもちょっといじったら使える。ところが、日本で出てくる番組とアメリカで出てくる番組とは全然違うわけです。何が違っているかというと文化が違ってるということだと思います。文明とはそういう意味で画一化をもたらす。建築でいうと、ＣＡＤ技術だとか構造を設計する技術はどちらかというと文明的な側面です。どこでも同じになる宿命をもっているわけです。ＣＡＤがある事務所にあり、別の事務所も入れたら差があるかというとＣＡＤシステムについては何も差がない。入れた途端同じ条件になってしまう。どこで差がつくかというとそれを使って何を作っているかというところです。

テレビでいえば低俗番組もあるし、教養番組もある。受像機は松下製でも日立製でも同じであり、価値は何チャンネルはどのような放送をしているかというところで差が出て来る。建築もそういうことだと思います。技術は急速に進歩するけれどもしばらくすると追いついてしまう。差はその技術で何が作れますかというところになってくる。

そういう意味では、ある規模以下の設計事務所はこの事務所は何々文化だといわれるような特徴のある文化を作っていくことが必要だと思いますね。病院が得意だとか、学校が得意だとか住宅が得意だということになると思いますが、同じ学校でもこういうスタイルとかこういう雰囲気の学校があそこは得意だとかいう特徴です。つきつめていけば文化をそこの事務所が持っているかということですね。それでは文化は何からできてくるかというと私は人間というものをどう理解しているかということだと思います。最初に言ったように、「人間」というものをいかに理解しているか、ということが建築家なり建築事務所にとってもっとも重要なことだと思います。

月尾嘉男

1942年愛知県生まれ。1965年東京大学工学部卒業、1971年東京大学大学院工学系研究科博士課程修了1978年工学博士。都市システム研究所所長、名古屋大学工学部助教授をへて、1988年より名古屋大学工学部教授。専門の都市計画と交通計画のほか、インテリジェントビルの研究でも活躍。著書に『装置としての都市』『情報化時代のビジネス環境』『都市開発のターニングポイント』『建設産業リストラクチャリング戦略』などがある。

スペイン建築視察旅行

古代の遺跡を始め各地に残る文化遺産とガウディの作品を訪ねて

前回お知らせしました募集案内を次の通り訂正させていただきます。

1989年４月７日から４月17日まで11日間

☆募集人員　20名以内
☆申込締切　1989年２月28日（火）

☆日程と費用（詳細は事務局まで）

最少の費用を目指して計画しました。マドリッドを発着点としてスペイン国内をまわるスケジュールですが、オプションでマドリッドからバルセローナの間の４，５日間を自由にスケジューリングすることもできます。

☆視察旅行のポイント

ガウディゆかりのバルセローナをメーンとし、アンダルシャ地方まで足をのばして今に残っている３世紀の頃からのスペイン国内の歴史的な文化遺産の主として建築の視察と、あわせて新東通信、日本カタルーニャ協会、スペインで活躍中の丹下敏明氏などのご協力を得て天才ガウディとその後継者の作品を十分に視察するとともに、バルセローナオリンピック施設の建設状況の視察およびスペイン建築家との交流を図ることにあります。

☆主要視察候補地と視察対象

●マドリッド　プラード美術館（1819完成・ピカソのゲルニカもコレクションの一つ）、プエルタ・デル・ソルとマヨール広場、王宮（1764完成）、サンタ・テレサの修道院、闘牛博物館等

●トレド　カテドラル（1227～1493）、サント・トメ教会、エル・グレコの家、サンタ・マリア・ラ・ブランカ

（アンダルシア地方）スペインの中で最もスペインらしい地方である。

●セビーリャ　ビラルダの塔（12～16世紀）、カテドル（1402年から約１世紀かけて建てられた世界最大の寺院）、アルカサル城（13世紀から14世紀にかけて完成されたもの）、ペドロ王の宮殿（1350～69）、コロンブスの墓等

●コルドバ　セビーリャから特急で１時間15分。約 1000 年の昔はヨーロッパ最大の都市であった。

モスク（８世紀の建設）、アルカサル（14世紀に改修された）、闘牛博物館等

●グラナダ　アルハンブラの宮殿（13世紀から16世紀にかけて建築された）、カルト派修道院、サン・ニコラス教会等

（カタルーニャ地方）１番西欧化された新しい顔をもった国がカタルーニャ地方である。

●バルセローナ　カテドラル（13世紀から15世紀にかけての建造）、ミロ美術館、ピカソ美術館、グエル公園、グエル邸、カタルーニャ美術館、ミラ邸、サン・パブロ寺院、カサ・カルベット、アントニオ・ガウディとその師弟の建築物、サグラダ・ファミリア、集合住宅ペドレラ等

1992年オリンピック施設の完成したものと建設中のものの視察

バルセローナ行政当局への表敬訪問をするほか、スペインの建築家と懇親会を開催し意見の交換をすると共に、建築家の日西交流の道を開くこともこの視察旅行の目的である。

主催　社団法人新日本建築家協会東海北陸支部愛知部会
協力　新東通信／日本カタルーニャ協会／イベリヤ航空

都市への提言

路地のある街

三重大学助教授
北原理雄

40歳を過ぎると「原風景」が身にしみるリアリティを持つようになる。思い出に対して一段と締まりがなくなるのだろうか。昨年の秋、『異人たちとの夏』という映画を見てそう思った。

主人公は、風間杜夫が演じる40歳のシナリオライター。世田谷の環状８号沿い、夜になると深海の底のように人気が失せ、ヘッドライトだけが絶え間なくブラインドの外を流れるマンションに、妻子と離別して住んでいる。ある日、生まれ育った浅草に足を向け、ふらりと入った松竹演芸場で、彼は12歳のときに死に別れた父（片岡鶴太郎）に出逢う。父と連れだって戻った言問通り北のアパートに、昔のままの母（秋吉久美子）が待っている。

長屋が並ぶ路地の奥、木造モルタルの安アパートの２階からは、家並みの向こうに花屋敷の飛行塔と新しい高層のホテルが見える。

これは、高度成長期以前には、どこの街にも見られたありふれた風景だった。貧しくみすぼらしいが、確かな手応えの生活があり、大人たちの社会の織目のなかを、子供だった私たちが駆けまわっていた。その後、郊外の住宅地に引っ越し、数えてみればそこでの暮らしの方が長かったのだが、思い出のなかの自分は、いつも路地裏の街に帰っていく。

名古屋でも、最近はいささか観光地風に整備されすぎてしまったが、屋根神さまと銭湯のあいだを抜けて四間道裏の路地に足を踏み入れると、水に打った石畳の奥に地蔵尊が祭られ、両脇に鉢植えの草花が飾られている。格子戸には、「いとう」と家主名が透かし彫にされている。そこには、まだ私たちの原風景がある。しかし、住んでいるのは老人ばかりのようだ。かつて路地を駆けまわっていた子供たちは、どこに行ってしまったのだろうか。

路地の入り口から西に、立ちふさがるようにそびえる高層住宅が見える。そこには沢山の子供が住んでいるのかもしれない。だが、狭く薄暗い廊下を歩いても、屋上の遊び場に足を運んでも、やはり子供の姿は見当たらない。鉄の扉の向こうで、テレビゲームと時を過ごしているのだろうか。彼らは成長して、どのような原風景を持つことになるのだろうか。索漠とした想いが胸を横切る。

私たちは、次の世代のために、いま少し豊かな風景を残すことはできないだろうか。街には、たとえ都心部であっても、人が住まなければならない。こうした認識は、最近では、かなり一般的なものになってきた。しかし、それはほとんどの場合、住宅の高層化、あるいは業務ビルへの住宅の上積みの概念と結びついている。

高層住宅を一概に否定するつもりはない。けれども、この形式の住宅を住みこなすことができるのは、相当額の維持管理費を無理なく負担できる階層に限られるだろう。それ以外に、私は、この形式が満足すべき住環境を実現できた例を知らない。

都市内では、高層化が経済の論理だと言われるかもしれない。本当だろうか。確かに、幹線街路沿いでは高層化が顕著に進行している。しかし、一歩奥に入れば、まだ低層の街が一般的な形態でありつづけている。名古屋の都心部、碁盤割のなかを歩いてみれば、それがよくわかる。このパターンを崩しているのは、皮肉なことに、経済論理を無視することのできる「公共投資」だけだと言っても過言ではない。

幹線街路沿いが高層化するのはやむをえない。あるいは、望ましいと言ってよいかもしれない。しかし、その裏側の街については、画一的な高層化のイメージを脱却し、もっと人間的なスケールの、たとえば路地のある街の空間を再生産することはできないだろうか。表通りの高層建築と裏通りの低層の家並みがワンセットになった「饅頭型」の街のイメージと言ってよい。それは、個々の住民が街の再生産サイクルに参加し、自分たちの手で街を維持管理していくことができる、そのようなプロセスを物的に支えることにもなるだろう。

木造の街が、問題を複雑にしていることは否定できない。だが、決定的なものではない。鍵を握るのは、長屋と路地そのものではなく、タイプである。本当の意味での都市住宅のタイプを、いま再構築することの重要性を改めて強調したい。

東京でならば、建築家や計画家が異常な開発圧力に押しまくられ、海を埋めることにしか未来を想い描けなくても仕方がないのかもしれない。しかし、まだ地上げが横行するまでにはなっていない名古屋では、街から逃避することなく、何気ない日常の場面を明日の原風景に織り上げることのできる生活空間を提案することが、私たちの役割ではないだろうか。

新日軽

きっと、都市の新しい顔になる。
横連窓「セイムシリーズ」。

多彩な設計コンセプトへの的確な対応で、高い信頼と実績を誇る新日軽の横連窓。その豊富な経験、技術の集約が生んだ「セイムシリーズ」。外壁とガラス面を同一ラインに納め、開口部に不可欠な機能・施工性を満たしたデザインは、開放感溢れる居住性を提供します。

日軽サッシ
SAME
セイム・シリーズ
SERIES

新日軽株式会社
本　社　東京都江東区木場2-7-23(第一ぴる)
名古屋支店　〒464 名古屋市千種区3-8-10
(安田生命今池ビル5F)　☎052(731)1911

新刊案内

この巨大都市に棲む　ー異説都市空間論ー

池田亮二著

46版上製 272頁　1,800円　葦真文社

今こそ市民構想による都市論よ起これ！あまりに都市に無関心すぎた結果、自らの住まいを郊外遠くへ放逐し、文化や教育・福祉をパロディ化していく。建築プランナー会心のスーパーエッセイ。

絵で見る近代建築とデザインの歩み

ビル・ライズベロ著　内田茂・越智卓英訳

2,600円　鹿島出版会

著者はイギリスの建築家・都市計画家だが、同時に平和運動家で労組運動家でもあるという立場から、産業革命以後の近代建築史を中産階級が主流化し、社会的・文化的な覇権を握って自己保存につとめていく過程だととらえる。そしてその歴史は建物の図解などを含めながら説明されていく。

インテリアペーパーモデル

岩下繁昭著

B5版 110頁　2,400円　彰国社

インテリアパースから理解するのが難しい人の為、またモデル作りもホビーとして楽しめる型紙も多数収録。手引書として役立てたい。

フランク　ロイド　ライト“幻の建築計画”

ブルース・ブルックス・ファイファー著

遠藤楽訳

B4版 163頁　18,000円　グランドプレス

フランクロイドライトがデザインした70余の図面を収録。偉大な建築家の未発表を含む作品「人類の宝」集。

世紀末空間 建築とインテリアデザイン

写真／田原桂一　文／三宅理一

B4版 271頁　28,000円　講談社

ヨーロッパの世紀末建築は外壁を侵食し、内部にまで蓄積する一条の光。魅力的な写真集。

くらしの豊かさを求めて⑧ 住み方を創る　人とモノのいい関係

渡辺光雄／中村民地著

B6版 256頁　1,500円　連合出版

時代とともに変化してきた住宅は今後も大きく変化していく私たちに必要な住空間を考えるいくつかの視点の提供書。

住・居・人の発想

天野彰著

B6版 237頁　1,200円　日本実業出版

二世帯住宅、リフォーム、同居住宅など豊富な実例で夫婦、親子関係、老親同居等、快適居住のための家を考える。

負けてたまるか 建築確認

矢野洋著

B6版 326頁　2,300円　鳳山社

建築家への福音書。建築確認必勝虎の巻。技術法規のあるべき論。解釈運用ルールへの提言等。

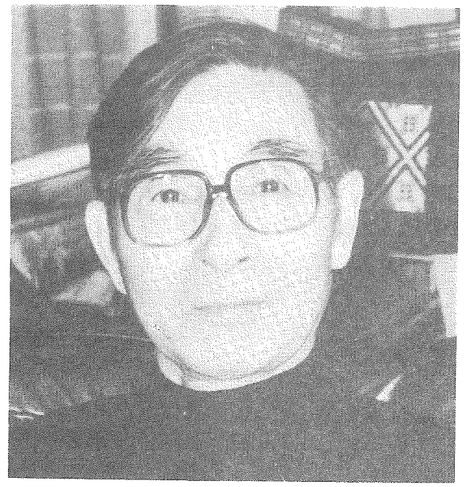
（丸善調べ）

玉田冨雄先生訪問

ご機嫌いかがですか

きびしい建築家への眼

映画を見てまわる毎日
昨年はなんと151本を観賞



玉田冨雄さんは、誠実な人、知性の人、良識の人である。気どらない人柄とともに多くの建築家の信望を集めてきた。

戦争前の早稲田で今和次郎、今井兼次の薫陶をうけ、大正デモクラシーの息吹が残る建築教育の環境で育った。建築家としての使命感を貫き、倫理感高く清潔な存在であった。

岐阜県で戦後もっとも早く事務所を開いた一人であり、現在岐阜県建築士会長をつとめる堀池康雄さんとのコンビで岐阜県建築界をリードしてきた人である。1970年代には岐阜県建築設計監理協会の会長をつとめたこともある。日本建築家協会東海支部長に推されたことも何度かあるが固辞して受けなかった。

岐阜県の地方自治体からも信頼が厚く、多くの学校施設や公共施設を手がけてきている。その事務所も5年前、息子さんの正美氏に譲り引退してしまった。建築団体からもすべて退会し、顔が見られなくなった。

玉田さんのもうひとつの顔は戦前の弾圧の激しい暗黒の時代に反戦の旗を掲げて闘ったマルキシストとしての活躍がある。

ＲＩＡの総帥となった山口文象とも早稲田大学時代は運動を通して親交もあり、早稲田大学教授を長くつとめた武基雄とは同級生で席順も「タケ」「タマダ」と呼ばれる親しい友人であった。結核で岐阜へ戻り、県立岐阜商の教員をつとめたこともあるが、戦後はいち早く日本共産党の岐阜県党の創立に参加し、自宅を県本部に開放し活躍した。玉田さんを知る人ぞ知る歴史がある。

1960年代に中野重治、野間宏、安部公房などの知名人、文学者、芸術家、学者が共産党を離れた時期に離党しているが、玉田さんの正義感、ラジカルな考え方は少しも変わっていない。

玉田さんのもう一つの顔は、教養人、趣味人の顔がある。玉田さんの父は戦争前の岐阜県政界を二分する有力な政治家で県議会議長をとつめると同時に映画館をいくつも経営する実業家であった。その影響があってか、玉田さんの映画好きは無類のものがある。

そんな玉田さんを岐阜市役所近くにある自宅に久しぶりに訪れた。

ストリップへ行った

――最近はどういう生活を送っておられますか。

玉田　別に変わりなく、昔といっしょでね。ご承知のとおり映画を観て歩いてね。

――月何回というより週何回行かれますか。

玉田　週何回というより、去年みんな観たのを数えてみたら、151回だった。

――一日おきと言わないけれど。

玉田　2本立てもあるからね。

――観た数が151本ということですか。

玉田　まあ100回というところかね。

――その他、芝居もあるでしょう。

玉田　芝居は月一回ぐらいだ。観たいものがそれほどないからね。それに音楽会とか。要するに珍しいもの好きだから……。ストリップも行くし。

――まだ、行ってみえるんですか。

玉田　まだといっても、この間10年ぶりぐらいに。

――以前に京都の有名な東寺のストリップに行かれたと聞いたことがあります。

玉田　だから、だいぶん長い間行っていないからどうなっているかなと思って、去年だけれどね、行ってみたけど、あんまり変わっていないな。だからあちこちひやかして歩くのが日課かな。

――読書は最近どんな傾向のを読んでおられますか。

玉田　これももう手当り次第で、前はあんたに話したこともあったと思うが、「科学・技術」でね。ハイテクとかいうのに疑問を感じて、しばらく科学技術書を読んでみたが、こちらに限界があるから突き当たったところでやめてしまった。

それから中世に関心をもってね。ヨーロッパ、日本の中世などをね。別に系統だって読んでいるわけではないけれど、関連あるものを読んでいるのだけれど、そのほか手当り次第にそこらへんにあるものを読んでいる。

――興味がひくがままに。

玉田　そうだ。だけど小説はあんまり読まんね。

――ぼくもそうです。新幹線なんかでたまに

時間つぶしに読むくらいで。
玉田　ぼくもね。非常に評判になったのを読むくらいで、作家によってね、深沢七郎なんかをあれは全部読む。
――深沢七郎はいいですね。深沢七郎の「楢山節考」なんかは最近亡くなった大岡昇平と並んで戦後最高の文学じゃないですか。
玉田　あれは傑作だね。李恢成とか金達寿の朝鮮とかアジアの知らない作家のものをその国を知る上で読んでいますね。

長生きしそうだよ

――健康の方はいかがですか。
玉田　身体の方はね。呼吸不全があったけれど、年々よくなっていくみたいでね。軽くなっている。今なんかは絶好ですよ。悪い時は声がかすれてしまってこんなに話ができないですよ。
――たしか先生は低血圧もありましたね。
玉田　低血圧もあったけれど、これはそんなに苦にならない。
――何か特別に健康のためにやっておられるのですか。
玉田　何もやらない。ぼくは歩くのが好きでよく歩きますよ。だけど健康のために歩くのではない。健康の点からいえば、呼吸不全をのぞけば、だれよりも元気だ。いわゆる成人病というのが何にもぼくにはないからね。長生きしそうだよ。
――若々しいもんね。いくつになられたのですか。
玉田　77。
――建築家協会の会員を辞められてから3年でしょう。事務所の仕事もまったくやっておられないでしょう。そうすると気力を失って普通の人だととたんに年をとってしまわれる人が多いですよね。
玉田　そうかも知れんね。しかし、それは仕事熱心だった人のいうことだ。
――なるほどね。もともと今のような生活が本当だった。
玉田　そうそう。もう遊び半分に建築をやっていたようなものだから。むしろ解放されたという感じだね。ある程度の義務感があったでしょう。それがなくなったのだから。だけど建築には関心はあるですよ。
――陰遁という言葉がありますね。日本では世捨人のようにとられていますが、中国では官職をやめて野にくだって自然を生活とするということで、高い地位の役人となって悪い政治に協力するのはいやだぞという意味だったそうですね。
玉田　反抗でしょう。官とは違うけれど事務所の仕事も営業的なこともやらなければ経営もできんというジレンマがあったでしょう。事務所の経営は負担ですからね。そんなことをやらなくてもいいということになれば気楽でいい。

プランの幼稚さに驚いた

――建築界を離れてある意味で外から見て建築の世界はその後いかがでしょう。
玉田　ちっともよくなっていない。ますます悪くなっていく傾向にある、と陰ながら切歯扼腕しているよ。モラルの点でね。デザインの問題はわからないけれど。
――とくに先生は建築家協会の会員としてモラルの問題を熱心にとりくんで来られましたからね。
玉田　ぼくはデザイナーじゃないから、デザインは自信ないし、はっきり言えばわからんといっていいぐいのものだけれど使命感をもって建築をやってきましたからね。それがますます悪くなっていくというのは見るに耐えない。しかし、デザインの点から言ってもあんまりいいと思わんな。ぼくらは近代合理主義のシッポを引きずっているから、今のポストモダンなんかとは根本的に相いれんものがあるね。5、6年前か、その前からか流行りだして、デザインの理想なんかがなくなってきたという気がしていた。この前名古屋で若い建築家の30何人展というのがあって見てきたのだけれど、デザインは相変わらずポストモダン。そこでぼくは痛感したんだけれど、何が若いと思ったね。プランだよ、プランなんかはぼくらの学生時代と同じだよ。ちっとも新しくなっていないし、変わっていない。いったい何を考えているのかと思ったね。かっこうばかりで。
――そんなにひどかったですか。
玉田　とにかく方法というものがないのではないかな。ぼくらの学生の時代の幼稚なプランと変わらない。
――あそこで展覧会をやった人たちは名古屋でそれなりに力をもっている建築家と思われている人たちですよ。
玉田　学生時代のプランといっても1年生の時はじめてやらされた日本住宅のプランというやつで、それとまるっきり同じなんだよね。
――要するに未熟なプランということですね。
玉田　そうそう、学生でも上手なのはいるからね。そうではなくて、イロハのイで大学で一番最初にやらされた習作と変わらないプランなんだよ。もっとも明治以降の日本の住宅のプランで、定型化されたプランであり、伝統となったものだといわれれば、そうかも知れんがね。だけれども現代のものとは思わんね。
――生活が変わってきているのですからね。
玉田　まるっきり変わってきているんだから。建築だけが百年前と同じものでいいというはずがない。ほとんど全部がそうだから驚いたね。寺島さんだけがちょっとよかった。これはいけると思ったけど、あとひとつもなしだ。驚いたな。

建築にも建築家にも絶望

――建築家の質が落ちているんですかね。
玉田　どうかなあ。
――勉強しなくて、モラルが低下して、理念も使命感もなく、建築へのイマジネーションも構想する力もない人がどんどん増えているでしょうか。
玉田　ぼくはそこまで言う自信はないけれど要するに方法をもっていないということだと思う。だから恣意的に思いつきだけでやっているという気がするのだけれどね。
――もっとも方法論をもってしまえば立派な建築家になってしまう。
玉田　それと主張というものが個人個人はもちろん建築界全体に指導的なものがないでしょう。

――全体にない時代ですね。名古屋のデザイン博なんかも、デザインとしての理念なんかはまるでなくて、イベントをなんでもいいからやれればいいという程度のところから出発していますが、全体にそうですね。
玉田　その意味で、ぼくは建築にも建築家にも絶望しているんだ。

大切なのは使命感だ

――映画のほうはどうですか。
玉田　映画もつまらんね。それもあって最近はあんまり見ていないのだけれど、日本の映画はほとんど見るものがなくて、アメリカの映画もつまらん。ヨーロッパにはいいものが割合ある。とくに東欧諸国にね。ハンガリー、ポーランド、ギリシャ。それにラテンアメリカにおもしろいものがある。東南アジアもいい。
――それらの国は何か人間としてのエネルギーをもっている国のようですね。
玉田　新興国と民族意識に燃えている国だね。それからもうひとつ憶測だけれど、いいのしか日本には来ないということもあるのかも知れない。たとえばインドは世界で一番製作本数が多くて年に 851本もつくっているが、ぼくらが観るのはほとんどいい。だから日本へ来るのはほんの一部で、インドで上映されるのは歌と踊りの娯楽映画が大半だそうだ。そうだけれど、日本などと違って頽廃がない。アメリカ映画ときたら、お化けの出てくるホラー映画というのばかりでしょう。日本でもそうだ。伊丹十三もホラー映画でしょう。あんなもの観る気にならんね。こういうものしかないですよ。いわゆる先進国の映画というのは。
――そういう点からいくと、映画の風潮も建築の風潮も同じところにあるという感じですね。
玉田　そう思うよ。建築と映画だけでなくて全部が全部そうじゃないの。一種の頽廃文化だね。体制をなしているものは俗悪なものがはびこっている。
――そうですね。
玉田　だから、そんなものを観ているよりストリップを観ている方がまだいい。（笑）あれは大衆のものだからね。
――いまのストリップは本番ストリップでやるんですね。
玉田　そうだよ。東京の浦安が有名で、わざわざ観に行ったね。
――だけれど一度観るともう二度と観たくないですね。
玉田　そう。だけど小沢昭二が言っている世界でね。歌舞伎町の風俗営業の女たちが深夜番組なんかに出て来ていろいろ語っていることを聞いていると、彼女らはそれなりに使命感をもっているね。プロフェッションだよ、あれは。建築家よりえらいよ。
――どういうふうにですか。
玉田　モラルの問題は抜きだよ。ただ男たちにはこういう欲望があるのだ。だから楽しませてやるのが使命なのだとね。昔からストリップを観に来ているのは60歳、70歳の年寄りが多いのだよ。一番前で目をきらきらさせて観ている。そういうのがステージからみていてわかるわけだ。だからこんな熱心に観ていいくれるのだから、これに応えようと思うと彼女たちは語っている。誇りと使命感をもっている。小沢昭二もそういうことをいっている。彼女たちは金のために卑しいことをやっていると言えない、とね。

玉田さんへのインタビューはこんな調子で延々と続いた。老人問題のこと、政治のこと、文化について、共産主義、社会主義のこと、戦前の官憲弾圧のこと、天皇制のこと、とりとめもなく延々と続いた。ますます玉田さんは若くなっている。話足りなくて、玉田さんの広い書斎から長良川観光ホテルの喫茶室へ身体を移してなおも語りつづけた。玉田さんの気どらない、しかも真摯に生きた人のもつ語り口は聞く者を飽かせない。玉田さんの人柄にあらためて魅力を感じ帰途についた。

中村遊廓ウォッチング

2月14日「稲本」を探検

2月14日、瀬口豊橋技科大助教授の案内で、ＪＩＡ東海北陸支部愛知部会の主催によるウオッチングが名古屋市中村区の中村遊廓にて行なわれた。豊橋技術科学大学の瀬口哲夫助教授の案内でウォッチングはこれで2回目。参加者は20名。

中村遊廓は、全国でも屈指の廓町であったが、時の政治や戦争の被害によって少しずつ縮小し、売春防止法の制定後、30年たった今は、多くの廓が旅館や料理屋に姿を変えている。

このたびの中村遊廓ウオッチングは、当時の面影を現在も随所に残している料理屋“稲本”にスポットをあて、瀬口助教授と稲本さんの説明を交えながら当時の様子をうかがった。今回が初めての人が多勢いたせいか、見るもの、聞くものすべて興味津津の様子だった。12時半から始まり2時半に終わる予定だったが、今後このような機会を設けることは難しいとのことで、時間を延長、4時半頃に解散した。

今回のＪＩＡウオッチングは、会員だけにとどまったが、次回からは、ＪＩＡの役割を知っていただくために、誰でも参加できる企画をすすめていく予定。

自然体であり続ける

木和田悦代

柳神建築設計事務所
設計部チーフ

34歳の柳のようにしなやか、かつはりのある女性である。

柿の木が群生する豊橋市郊外で、ひときわ目だつ建物、柳伸建築設計事務所に勤務する。11人の所員中、設計部門のチーフをつとめる。

大学卒業後、ずっとこの仕事に対する気負いがまるでない。極力、自然体でやってきたという感じだ。本人いわく、28歳ごろから肩の力が脱けたそうだ。ちょうど一級建築士の資格もこのころとっている。やはりさらりとやってきたように見えても、最初は女性として特別扱いされたくない、現場でも甘く見られないようにと、頑張ってきたことはあるようだ。当然であろう。やはり、技術職として独立した仕事をやりこなしていくためには、また部下をもつようになるには、相当の努力もしてきたにちがいない。それが、やっているうちにおもしろくてどんどんやってきてしまったという。残業も10時11時までやり、仕事も選ばないで率先して難しいことに取り組んでいく性格と、同僚は評していた。また、片道車で一時間もある自宅との往復は、肉体的にもハードである。

この道にはいったきっかけは、人があまり行かない学科、住居学科がおもしろそうだと思い選んだという。建築科と比べて、その内容は器そのものではなく住まい方に重点を置いたものだったというが、卒業後も迷わず、興味本位のまま知人紹介で今の事務所に入る。

最初は、設計の仕事は地味で毎日図面とむきあってるんじゃないかと思っていたが、実際は打ち合わせなどで人と話をし、相手の気持ちをくみとりながら、いかに自分の意見も理解してもらえるかが、大切な要素となってくる。仕事のやり方を通して、自己主張ができる人間になってきたという。

個人住宅を多く手がけている性質上、一度建築主と知り合うと親戚づきあいのように親しい間柄になる。地方都市の特色としては、周囲からとびぬけてしまってはいけないが、設計を依頼する以上、何か個性的なものをという人が多いとか。そういった気持ちをくみとり、設計にどこまで織り込むかが仕事の裁量となってくる。女性としての神経のきめ細やかさが不可欠な分野である。しかし、基本である技術の勉強は怠らない。

所長がよく言うそうだ。「技術屋は、技術ができてあたりまえ、図面センスがあるのがあたりまえ」と。その上にどれだけ自分の持ち味、人間味が加味できるかが仕事の良し悪しになってくる。

この人が職場環境で窮屈さを感じないのは、所長の仕事に対する考え方、組織づくり、男女の差別なしに起用する姿勢に負うところが大きい。またそれに答えようと努力してきた気持ちが、話をしていると伝わってくる。

この事務所では、週一回、仕事の後に福利厚生の一環で、みんなでテニスをする。これも仕事のチームワークをよくしている一因であるようだ。これが高じて、休みの日にもテニスをかかさずやる。体力作りもしっかりしている。見かけは、たおやかだが、元気いっぱいの人だ。

ただ、この自由でしばられない環境も、裏を返せば、情報に疎くなったり、刺激が少ないということになる。それをさけるためにも、愛知女性建築技術者の会に入り、井の中の蛙にならないよう心がけている。

建築家の仕事の特徴は、いつも相手になる人が精神的、経済的に人生でいい状態の時、出会えることだという。弁護士にしろ医者にしろ、建築家に比べて、必要にせまられて依頼することが多い分、状態としてはよくない時である。だからいい状態の人が、ほんとうに喜んでくれる仕事をしていくおもしろさを感じている。

結婚しても、もちろん続けていく。生活体験を武器にした違った要素もどんどん設計に盛り込んでいけるにちがいない。

そうなれば、新しい設計の方向性もでてくることだろう。

職業としての建築⑤

ギリシア・ローマ時代の建築家を下敷きにしたルネサンス期の建築家像

瀬口哲夫
豊橋技術科学大学助教授

家であらねばならないとしており、この点で従来の大工などと建築家は異なるという意見をのべている。

なるほどヴィトルヴィスの建築十書を見るとこの点もふれられている。アルベルティもまたヴィトルヴィスなどギリシア・ローマ時代に範をとっていることがわかる。ヴィトルヴィスの著作の内容は、建築の構成、柱のオーダー、プロポーションといった実際的な建築設計についてもふれており建築を行う人の貴重な手引となっていたのである。

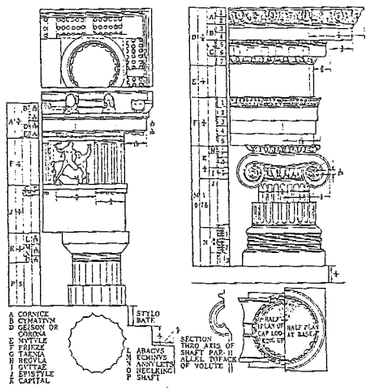
1．ヴィトルヴィスの著書が手本

17世紀後半から、英国では従来からのマスター・メーソンにかわり、建築の設計を主とする建築家が登場することになった。時はルネサンスという時代的風潮と対応しており、これらの建築家のありようはルネサンス的建築家像とも称される。このことからも類推されうるように当時の英国の建築家像は、ギリシア・ローマの古典時代の建築家像を下敷きにしている。具体的に言うとジョン・シュートにしても、彼の述べる理想的建築家像は、ローマ時代のヴィトルヴィスの手になる建築十書にある建築家像とほとんど同じものである。つまり建築だけでなく、それを作る人々もローマ時代のあり方に範を求めたということである。ルネサンスという時代の風潮はこのように幅の広いものがあった。英国ではルネサンス期になってはじめて建築家という名称を用いる専門職の人々が登場してきたこと、そしてこの建築家と称する人々の手元となったのが、ギリシア・ローマ時代の建築家像であったということである。

2．諸学の大家としての建築家（アルベルティ）

もちろん、ルネサンスというのは英国のみの現象ではなく、ヨーロッパ各国で生じた現象である。したがって英国ばかりでなく本家のイタリアでもルネサンスの到来によって、従来の設計者にかわる新しいルネサンス的建築家がどんなものかということを述べている人がいる。アルベルティ（1404～1472）もその一人である。彼の著作は15世紀後半のものである。『私の言う建築家とはどういうものなのかを説明するのが本筋であろう。というのも大工や指物師を諸学術の大家と同列にはみないということである。手仕事をおこなう者は建築家の手足以上のものではない。私が建築家と呼ぶものは思想と創意に富み、堅実・秀抜なる芸と術で全作品を創案し、その完全たる実現においては重量物の運搬、物体の接合、積み上げにより人間の用途に供するも、ことごとく至高の美をもってなしうる者である。これを可能とするために建築家はもっとも崇高でもっとも精密な学術に関する豊かな学殖をもち合わせていなければならない。建築家とは他ならぬこのようなものである。』（注1）

アルベルティにしても建築家は諸学術の大家であらねばならないとしており、この点で従来の大工などと建築家は異なるという意見をのべている。



「建築学体系」より　ドリス式とイオニア式

なるほどヴィトルヴィスの建築十書を見るとこの点もふれられている。アルベルティもまたヴィトルヴィスなどギリシア・ローマ時代に範をとっていることがわかる。ヴィトルヴィスの著作の内容は、建築の構成、柱のオーダー、プロポーションといった実際的な建築設計についてもふれており建築を行う人の貴重な手引となっていたのである。

3．芸術至上主義的建築家像（ヴァザーリ）

こうした先人の文章の中で注意したいのは、諸学術の大家であると共に、「至高の美をもってなしうる者である」という表現に見られるように芸術至上的な見解が散見されることである。この点をより強くして建築家像を説明しているのがG・ヴァザーリ（1511～1574）である。『建築は至高の判断力と巧みな意匠力を兼備し、絵画・彫刻・木版画に非常な修練を積んだ者の手になってはじめて達成しうる。なぜなら、人は、円柱、コーニス、土台といった造形物の一群、および、これらの造形物を美麗にするためにのみ設けられる諸制式を建築に見るからである。したがって、彫刻師は自らの専門をきわめればやがて建築家となる。彫刻家も墓標などの装飾を造る中で、当芸術を会得するようになる。画家の場合も、透視図、各種創意画をつくり建物を描写するにあたって、建物のプランづくりを考えざるを得ない。建築がまず実現しなければ彩管を揮う段階ないしその場が存在しないからである。』（注1）

ヴァザーリの考え方は芸術至上主義的な考え方をする人に受け入れ易いのではなかろうか。一般に日本での建築教育はアルベルティの言うように諸学の大家としての建築家の育成を考えているわけではないようだし、さりとてジョン・シュートの言うように建築家たる場合に守るべきことを教育しているわけではないように思う。日本の建築家の養成（学校教育）にあたって、現在は構造・環境そし

て機能という３つの側面が重視されているように思う。それだけに美的なものに関心を持つ人々はヴァザーリ的な考え方の中に落ち込んでしまいがちである。そして、ジョン・シュートやアルベルティの言うような建築家像にはなかなかつながってこない。

４．イタリアに端を発したルネサンス建築

話が少し脱線したがとにもかくにも、英国では建築家という名称が用いられるようになるのが、ルネサンス期である。そしてこのルネサンスは全ヨーロッパ的現象であったわけで、この時に多くのルネサンス建築家が各国で登場している。

イタリアでは15世紀から建築においてルネサンスが始まったとされており、この頃の建築家としてはフィレンツェの大会堂や捨子保育院を設計したブルネルレスキ（1377～1446）がいる。彼は金銀細工師の出身で建築家になった人物である。

この他ローマのテンピエットなどの作品を残しているＤ・ブラマンテ（1444～1514）や、フィレンツェのメディチ家廟やローマのカンピドリオ・サンピエトロ大会堂などを設計したＢ・ミケランジェロ（1475～1564）、さらに北イタリアのヴィチェンツァを中心にヴィラ・カプラ（ロトンダ）などの設計をしているＡ・パラディオ（1518～1580）などがあげられる。

Ｄ・ブラマンテは画家として修業した人物で建築家になっている。ミケランジェロは建築家としてばかりではなく、彫刻家としても有名である。

こうしてイタリアに端を発した新しい建築様式がフランス軍のイタリア侵入などで知られ、除々にヨーロッパ各地にひろがって行くわけである。地理的、宗教的関係があって、ルネサンスという新しい波の波及が一番遅かったのが英国である。

（注１）フランク・ジェンキンス著　佐藤彰・五島利兵衛訳「建築家とパトロン」
（訂正）２月号18頁　左列28・29行の「この点から当時の建築家を……むきもある」を削除。

河清百年「デザイン博に携わって」

林　　英光
愛知県立芸術大学助教授
環境デザイナー

先日、神奈川県逗子市長に呼ばれ、市の職員数十人にパブリックデザインの講義をしに行った。日本の都市環境ほど美的、造形的に混沌とした都市はない。大都市の一部都心が電柱の地下埋化など、道路環境の整備が進みよくなりつつあるが、それ以外は郊外に出ても別荘地へ行っても無残な風景しか無いのが現状である。すぐ近くに葉山の御用邸があり、東京圏のリゾート都市でもある逗子も同様であった。ＪＲ駅を降り、一歩外に出ると、日本のどこの都市にもあるどうしようもないわびしく雑然とした広場があった。シェルターもないバス停、緑色のフジカラーの旗や大手スーパーのだいだい色の看板、まとまりのない広場をかこむ建物群、どうしようもない駅前の交通動線、市役所へ行く前に予備知識をと思い、海岸やマリーナ、街を流れる川などを見てまわった。どれも経済大国の大金持ちが何人も住んでいる都市環境とはとても思えない有様であった。あの京都でさえも新幹線から見たとき、単なるスラム街でしかない。東海道を新幹線から見て、いわゆる中流の住んでいるような家はほとんど見当たらない。昔ながらの瓦屋根で常緑樹に囲まれた農家を時々見つけて、やっと人間らしい住居に出会い、わずかにホッとすることができるのみである。

多くの地方都市は明日を求め、街の行方をコンサルタントや、学者グループに依頼し、報告書をつくってはいるが、おざなりでどこの都市でも同じような、まるで金太郎アメのようなリポートを手にして途方にくれているのが実情である。リポートと現実との間には具体的な解決策やユニークで新鮮なデザインは何も示されていない。

野山の昆虫や、川や田んぼの魚類、鳥は消え失せ、荒れ果てた国土が経済大国の代償であったのだろうか。土木、建築、デザイン、教育ばかりでなく、あらゆる分野での目先しか考えられない教育が成功したからなのかも知れない。１人の人間が 100歩前進するより 100人の人々が１歩進むことの方が難しい。文化や民度は 100人の水準のほうで、はかられるように思う。全体の調和とか統一とか環境デザインの基本になることがらはあたりまえのようであるが、一度崩れてしまうと、もとへ戻すことは一世紀はかかるのだろうと思う。戦後、半世紀を経ても遅々として進まないのを見ると、文化の壊れるのは一瞬だが、回復はなかなか難しいことを示している。今、デザイン博の景観演出計画に携わり、その日本の縮図を見る想いでいるが、私の拙いその基本計画の一端を少しずつ紹介して見たい。

１．景観演出の基本的考え方

世界デザイン博覧会景観演出計画の大きなテーマは、人間的な「集社会的空間」の創造である。会場計画全体の骨組みやポリシーとともに、人間の行動や心理的要素、知覚のテリトリーなどの基本をふまえ、自然の生態系に近い空間づくりを目指すことにより、楽しく、疲れない、やすらぎのある魅力的なイベントとしての空間を創り上げることができる。

私達の生活環境は今まで経験したことのないほど、多くの問題に直面している。その１つは長い間、培われてきた大自然の生態系の延長としての人々のくらしが、近代文明の発展の中で大きく変貌してきたことである。そのため多くの人々は、さまざまな環境要因から受けるストレスの中に生きることを余儀なくされている。本来、人間は朝に夕に空を見上げ、観天望気、そして晴耕雨読というように、一日の変化、四季の変化を感じながら自然とともに生きてきた。たとえ、大都市の人工的空間にあっても、それを基本としてデザインが進められなければならない。また、我が国のデザイン的環境は、世界で最も混乱しているといっても差し支えない。

第二次世界大戦の廃墟から立ち上がったドイツとは、あらゆる意味ではるかに遅れた状態にある。その理由の一つはドイツは伝統や歴史の上にものづくりをし、経済や技術、文化面でゆるぎない着実な復興をしたが、我が国は欧米の一面に目を向け、自国の伝統や文化の継承に力をそそがなかったためである。今、我が国の環境デザインで最も重要な課題は、自然や伝統に基づいた、より人間的な環境のための適切なコンセプトの必要性と、トータルなデザイン的秩序の回復である。

さらに、戦後数十年の間、街づくりなどの環境に対する人々の考え方はさまざまで、伝統的な文化の延長でのとらえ方があまり重視されることなく現在に至っている。そこで生活環境も、都市環境も、新しい秩序の確立がなされるべき時に来ている。これからは、社会資本の充実にともなう魅力的な環境の創造が、重要な国民的課題の一つとなる。

２．景観演出の方向づけ

世界デザイン博覧会の会場施設計画は、計画全体が一つのテーマに沿った総合的なポリシーで貫かれることが大切である。景観計画において、色彩、音響、照明、サイン、ストリートファニチャーのそれぞれが、デザインコンセプトや基本イメージ等を忠実に守ることで、とかく曖昧になりがちな日本人のデザインに対する一般的な傾向を改めるチャンスでもある。それは会場全体のイメージ統一にとっても、かなり重要なポイントである。

ここでは、色彩計画、照明計画、音響計画、サイン計画、ストリートファニチャー計画などを、ランドスケープデザインとしての統一と調和を図ることを主体とした計画であるが、その他の施設設計、印刷物、その他世界デザイン博にかかわる諸々に、これらの調和を図るための考え方を関連づけていかなければならない。ここでは一つの方法として、人間を生物（いきもの）としての基本的な問題から捉え直し、社会的行動の秩序のベースとなるものとして示唆に富んだ、エドワード・ホールの著書「かくれた次元」にその原点をみい出し、デザインを考える上での出発点としてみた。いづれにしても多くの人々が世界デザイン博を訪れ、従来の博覧会とは異なった優しさや魅力、喜び、新しい感銘を受けてくれ、快適な気分で参加してもらえる様な計画としていきたい。

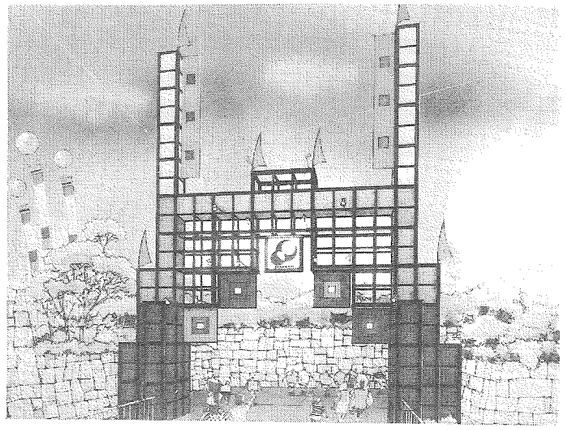
３．景観演出の方法

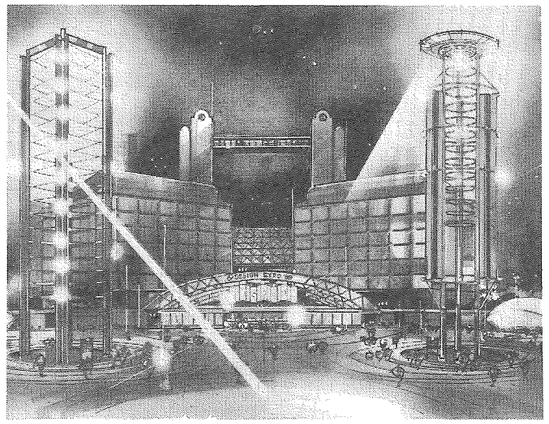
名古屋市は地形的に平坦で自然景観としてのきわだった特徴がなく、地域のランドマークとなる構築物も少ない漠とした都市空間である。世界デザイン博覧会の会場となる三つの地域は、幸い地域的特徴やランドマークとなるものがあるので、それらを個性的な景観演出の基準とすることができる。

景観を構成する要素はその場所の自然や地形が第一で、第二は都市の骨組みとなる道路、鉄道と、それにかかわる公共施設等、特徴的な構造物である。第三はその地域全体の建築物の形態や色彩がつくり出す雰囲気である。さらにその特徴を生かし、増幅させるのが、第四の乗り物や、小さなものから大きなものに至るストリートファニチャー類、サイン、植栽等である。

三会場それぞれが大まかに景観構成要素として分類するが、人間の視覚やテリトリーの問題から出発し、景観を秩序だてて計画を進める。景観演出のすべての分野を見わたし、「トータルデザインのための基本コンセプトとイメージ」に表現し、その秩序だてのスケールとして「知覚のテリトリーと距離感」「ランドスケープとビジュアルアイデンティティーデザインツリー」さらに色彩やサインの「垂直方向における色彩認識」「垂直方向におけるサイン標示のテリトリー」「視覚のテリトリーとサインの秩序」等の図に示した概念に沿って人と物の関係を位置づけ、色彩、照明、音響、サイン、ストリートファニチャーのそれぞれの役割りを明確にし、景観として構成して行く。

次回はさらに細部にわたり紹介していきたい。


名古屋城会場ゲート付近想像図


白鳥会場メインゲート付近想像図

構造家から建築家へ

構造家懇談会について

構造懇　中部　NO 8

構造家懇談会
豊島　祐昌

構造家懇談会は、建築構造の設計・監理に関する学術技術の発展を図り、社会に貢献すること、会員相互の親睦・情報交換を通じて構造家としての技術研鑽を図りつつ、職能に対する社会的理解を高めることを目的として、建築構造の設計・監理を専門とする人たちが集まって昭和56年５月に設立された技術者集団です。

正会員 100名で設立しましたが、本年１月末の正会員は1365名、準会員・特別会員・学術会員・賛助会員を含めて総数約1800名となりました。現在の会全体の組織構成概略は次図のようになっています。

懇談会としての活動を全国的に進め、また各地域特有の問題を取り上げ地域内での交流を深めるために、北海道・東北・中部・関西・中国・四国・九州の全国７支部があります。

中部支部は静岡・愛知・岐阜・三重・福井・石川・富山の７県内在住の会員により構成されており、56年11月構造家懇談会最初の支部として発足しました。現在正会員 121名・準会員７名・賛助会員４名・学術会員11名と関西支部に次ぐ規模の支部で、渡辺誠一支部長以下９名の支部理事で構成される支部理事会のもとに、技術委員会・事業委員会・広報委員会が支部活動の中核となっております。

以下に中部支部の活動概要を紹介します。

技術委員会は当会活動の基幹をなすもので、構造設計上の学術的理論体系・設計技術への応用展開・設計に採用されるコンピューター技術・施工技術について、会員相互の技術交流・研鑽を通じて技術の向上につとめ、社会の要請に応えることを目的としています。年間７～10回の技術委員会を開催する他４つの分科会が組織されて活動しており、活動の成果は会員全体に報告されます。「柱脚の設計と施工」（建築技術1985.2-8月,1988.12月）のように一般誌にも成果を発表し、さらに鉄骨構造設計講習会・ＬＲＦＤ研究会等その時々に対応したテーマについて、会員外の構造関係者も自由に参加できる公開講習会等の開催や、毎年建築行政担当の方々との意見交換の場を設け、必要に応じて実務の立場からの技術情報提供等も行っております。最近では愛知県で暫定施行されている「構造チェックリスト」の資料作成に協力しました。

事業委員会は会員及び会員外の方々の対象とした見学会・講演会等各種行事の企画・実行を担当・構造設計の範囲だけに限定することなく地域の建築界全体にとって有為なる企画を心掛けています。昨年度はトヨタ自動車の諸星和夫主査（自動車）・篠原一男東工大名誉教授（建築）の両先生による講演会「デザインを語る」を開催、会員外の方々も多数参加されて好評でした。

当支部主催の事業開催にさいしては新日本建築家協会をはじめとする建築関係諸団体の共催・後援等温かい御支援を頂いており、誌上を借りて厚く御礼申し上げます。

広報委員会は支部の広報一切を担当しており、当支部ではこの地域で設計施工された建物の構造紹介や支部活動報告等を中心とした機関誌“構造懇中部”を年間３回程度発行し支部会員及び関係者に送付しています。

私たちは高度な専門技術を有する建築構造設計者としての品位を保ち、倫理を高め、技術と技量を錬磨してその進歩改善を図り、建築家の良きパートナーとしてその責務を果たしてゆきたいと考えていますが、実務対応の合間をぬった“手弁当”活動が中心のまだ歴史の浅い集団です。建築関連先輩諸団体の暖かい御支援のもと実のある活動を進めたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

また、私たちは建築構造設計・監理者の中核集団としてさらに多数の仲間の参加を期待しているところです。入会ご希望の方は下記の会事務局または支部事務局に御問い合わせ下さい。

〒102 東京都千代田区九段北1-2-6
国松ビル　構造家懇談会事務局
TEL　０３－２６２－８４９８
〒461 名古屋市中区栄4-15-32
日建設計名古屋事務所内
構造家懇談会中部支部事務局
TEL　０５２－２６１－６１３１

設備設計家から建築家へ

専門分野の役割に正当な評価を

有機的に機能する社会にあっては、その構成要素別に分類して見ると実に多くの界が存在する。その中でも単に建設業界と聞くだけでもその語感からして巨大なる産業界であると感じられる。建設業界は一般には土木、建築業界の総称のようではあるが、その建設業界の巨大さは今日、年間50兆円をまさに超える巨大産業であり、その就業者数においても600万人前後となる産業界随一を擁する業界である。ここではこのような大きなことを論じようと言うのではもちろんなく、もっとわれわれの身近な部分である建築設計界について申し上げたい。

建築産業は産業全般に非常に影響をおよぼす底辺の幅の広い分野であり、建築に要する諸材料、諸器具、諸機械にいたるまであり、さらにこれに収容する計器、備品などを含めると広範な産業分野にわたり、これらを有機的、芸術的にまとめる総合産業である。この中心的役割を演ずるのが建築設計者であり、おのずとその役割の重要さは認識されるものと思われる。

さてこの総合産業の中心的役割を担う建築設計についてであるが、建築の設計が多くの専門分野の上に成り立っていることは今さら言うまでもない。人体を建築にたとえれば身体は建築であり、消化器系、呼吸器系統が設備、神経系統が電気設備に該当する。これらに従事する医師もまたそれぞれ専門分野別に脳外科、内科、外科、眼科、歯科etc と専門細分化されている。面白いことに身体の一部に欠陥が生じた場合は病気の本人が自分の判断にて必要な診療科を選択して治療を受けることが当然のようになっているのであるが、一方建築の場合はいったいどうなっているのだろうか。建築も先の専門医の場合と同様に建築意匠、構造、建築積算、機械設備、電気設備のそれぞれの専門家からなる共同作業から一つの建築をなしとげられるのである。これらを総合的にまとめる役割を演じているのが過去から今日に至るまでどうした訳か、建築家つまり意匠担当ということになっているのである。また悲しいことに一般社会人においても建築知識に乏しいゆえもあり、建築のことは建築家つまり先に述べた意匠担当に依頼するということになっているのである。

建築もまた総合産業でありながら、それぞれの専門分野に各専門家が存在しているにもかかわらず、建築のことは建築家（意匠担当）となっているのである。このことは必然的に意匠担当者があたかもその建築代表者であるかのようにふるまい、同時に他の構造、積算、設備、電気設備の協力者を容易にその分野の専門家として認めようとはせず、一般社会通念からもこの傾向が強く、結果として、建築意匠と構造、設備の間に元請、下請の関係が生じているのである。

他の業界においても同様の部分があり、元請、下請、孫請などの重層構造になっている。しかし、良識ある建築家はすぐれた建築作品を通じて、真価を世に問う姿勢が肝要であり、他の業種のように単にビジネスだけでとらえていいものか疑問の残るところである。世にいう下請に対して半値８掛などという状況に追いやっての協力要請は結果として良好な作品として生きてくるとは考えられない。建築事務所も構造、積算、設備事務所も同レベルでの業務展開が可能なように報酬面においても、配慮願いたいものである。建築家は多くの場合芸術家と技術屋と経営者の顔を有し、便宜的にこれを使い分けているように感じられる。協力事務所に対して設計料など契約もすることなく、設計を依頼し、設計時には技術屋の良心にしたがって仕事を協力させ、設計料についての申し出については芸術家的な金に無頓着を装い、営業面にては経営者としてふるまう面が強い。

下請は設計料も未定、支払時期も未定で設計協力している場合が多いなどというのは、建築設計界のみに存在する不可思議な世界である。

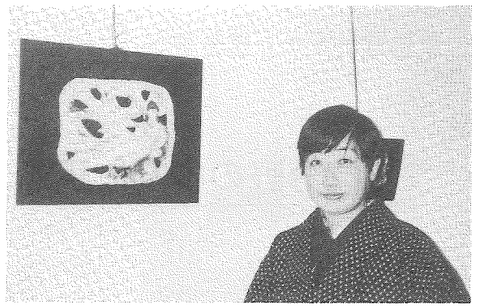
そこで提案したいのであるが、建築家は総合的なまとめ役であるならば、協力事務所に対して契約ということを厳に実行されたい。よく言われることであるが、アメリカは契約社会である。その契約行為の意義と重要性について理解願いたいものである。これは建築家がゼネコンの設計施工を批判するのと全く同じ問題であると考えるがいかがだろう。

さらに設計料と仕事量について設備設計事務所の側から日頃考えていることを言及したい。建築士の各団体に存する憲章などについて再度熟読願いたく思うのであるが、設計物件の競争入札などに見られるごとく、一方では不当と思われるほどの低価格での設計入札があり、他方官公庁への設計料増額の陳情などの大矛盾はともかく、低価格落札物件についての協力事務所の有り様は理解に苦しむものである。

人類の大いなる文化遺産である良好な建築作品を社会に提供し、結果として強力な建築設計業界とするためにも、建築家のみならず構造、積算、設備設計家をも含めた大きな視野に立っての行動を切望するものである。

（この欄は愛知県設備設計監理協会会員が交代にて担当します。）

自己主張する雛たち



陶芸家

神谷　あかね

作陶歴20年弱。ずっと器などの実用品でないものを作りつづけている。さまざまな試みをやりながらその中で、一貫してやってきたライフワークである陶雛を中心に、壁面飾りのレリーフなども製作。1／25～1／31に栄のギャラリーむが、でひらかれた「ひな段からおりた雛たち」では、地味で落着いた色調ながら、それぞれの雛たちが静かに自己主張しあっているかの如く、モダンで都会的な雰囲気をただよわせていた。

素朴な土の感触を持ちながら、不思議にその作風は西洋の匂いをもち、場所を選んでおかれるものだ。異素材のものや陶器の中に並んで決して目だつものではない。だがそこに、独特な美意識がある。

神谷さんの明るくてくったくのない笑い顔を見ていると、その作品は少し違ったものに感じられるが、それは内面は静かで、闘志を内に秘めたこころの現れであるように思う。

東京出身であるが、大学中にヨーロッパをまわり、より日本的なものにひかれていったという。卒業後、陶芸の道に入ることを決め、瀬戸の地を選ぶ。個展は、東京でやるものの生活基盤は、断固としてかえていない。8年前から、猿投山山麓の藤岡町に移り住み、着実にこの地に根をはやし広げてきた。

陶雛の歴史は、江戸時代に栄えた雛祭りのために、農民たちがつくった素朴な素材でつくる雛にさかのぼる。三河地方にも伝統的な土雛がつくられてきていた。

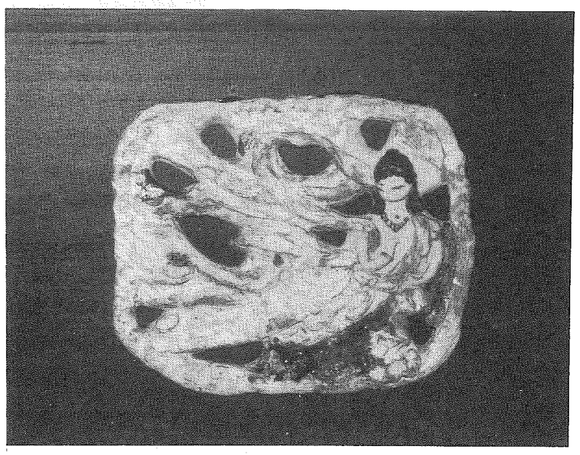
作品の特徴としては、伝統的なものを受け継ぎながら部分ごとに栗皮灰や草木灰の自然釉、土を使い分けるという手法を用いている。

「陶芸をやり続けるのは、出来上がったものが思っている色や形になかなかならないから」というように、1つとして同じ作品はない。作者の息吹のかかった個性のある雛たちが誕生してくるわけだ。だから見ていて楽しい。また、壁面のためにつくる陶板は、その土台に木を貼った布をつかう。布と陶との調和がおもしろい。

すかし彫りのようにつくられたその形態は、壁面にあっても陶の重々しさを感じさせない。その場所にあったオリジナルなものにもどんどん取り組んでいきたいという。インテリアの一部として置かれるばかりでなく、壁の一部を構成する陶壁として製作する。建築家とのジョイントによって、新しい素材を住宅の中にいれていく。そういった可能性は大きい。また、街づくりにも参加していきたいという。

抑制のきいた作品、かつフランクな人柄から、多くの人が共感できる楽しさを伝え広めていっていただきたい。

工房あかね
愛知県西加茂郡藤岡町飯野池下526
℡（0565）76－1459



追悼　川本昌光氏

2月11日午前0時30分、かねてから入院療養中であった川本昌光氏が肺癌のため死去された。享年63歳

川本昌光氏は昭和16年に篠田進建築事務所へ入所。昭和20年に篠田川口建築事務所と移り、昭和42年に設計部長、昭和58年専務取締役として活躍、所長を補佐し、つねに篠田川口建築事務所における中心的存在であった。

弔辞

陽春未だ来らず寒夜君の訃を聞く哀愁胸を貫く。
日頃君健康人に勝りしに旧蝕病に伏せしと聞くに分忽然と去る何を以てかく急ぐぞ。
君幼にして先師篠田進先生の門を叩き訓育を受け、学を名古屋市立工芸学校建築科に得たり。
然るに君在学中我が国未曽有の大戦起こる君意を決し滅私奉公の心を以て海軍飛行予科練習生を志願せり日夜訓練し将に出撃の刻、遂に大戦止む。
君再び篠田先生の膝下に帰る。我その後事務所を継ぎて四十余年、君常に我が辺に在り。
君の明哲なる頭脳良く依頼者の心裡を理解し、優秀なる技能は良くその依託に応ふ。
君所内に在りては常に所員の団結と育成に心掛け、時に事ありては我にも直言して援く。
時に暮夜星を頂き帰り又暁天残月を伴ひて職場に来り尽瘁の限をなす事ありき。
君次第に所内に重きをなし要職に当り、今日に到る。我れ今君を送る最大の恨事にして万斛の思ひなりされど運なり命なり、やんぬる哉。
黄泉の途未た寒しされど彼岸花を持ちて待たむ。
幸ひ君良き伴侶を得て家庭に恵れ、好き子孫あり。
心易く後事を託し以て瞑せられよ。

黄泉の道平安を祈る
平成元年二月十四日

川　口　喜代枝

施設紹介

A＆I快適を科学します。

“あかり”の演出を考える照明スタジオ

松下電工㈱

施主・建築設計事務所・設備設計の方々のための照明実験室として、昭和53年4月に開設され、名古屋裁判合同庁舎のエントランスホールの照明実験を皮切りに、美術館・博物館の展示照明、店舗の照明、ホテル・宴会場のシャンデリア照明など数多くの実験を重ねてまいりました。その後、実験設備の老朽化・システムの進歩に伴い再三改修を行ってきましたが、この程、設備の近代化がほぼ完了致しましたので、あらためて、照明実験室の設備概要とその使い方についてご紹介を致します。

＜設備の概要＞

実験室の広さ　10.2m× 7.0m
天井高さ　7.8m
電源容量　電灯 1Φ 3w　50KUA
動力 3Φ 3w　15KUA
・天井昇降装置　昇降天井5面
（昇降行程 7.1m）
床から天井まで電動昇降できます。
・調光装置及び操作卓
100V60A～20ユニット
パレータス記憶調光操作卓
（最大 350シーン）
・マルチイメージスライド映写設備
（4台システム）

その他、各種光源演色性ボックス、電気特性試験器などを準備しております。

＜主な使い方＞

企画構想・基本設計の段階から、あるいは実施設計の時点で各種光源・照明器具と建物の一部実物や縮尺模型を使い、照明設計の事前確認・評価を行うものです。建物を設計される建築士と施主の方々が同一の場（照明実験室）で照明について検討ができるのが特長です。

光源の違いによる色の見え方といった簡単な実験から、建物の縮尺模型を使っての空間全体の照明評価など幅広くご活用頂けます。

なお、ご利用頂く場合には、事前準備が必要でありますので、できるだけ早い目にご連絡下さい。また、どんな設備か一度見学したいという方々も歓迎します。

照明実験室の内部

照会先：松下電工㈱
名古屋エンジニアリングセンター
℡　052－586－1061㈹
担当　須谷修治

㈳新日本建築家協会東海・北陸支部愛知部会機関誌
*ARCHITECT*を
貴社の情報の場としてご利用下さい。

・貴社のイメージ広告として
・新製品の発表の場として
・営業所の移転、新設のご案内として
・設計営業担当者のあいさつの場として
・建築家とメーカーとの対話の場として

他に月極定期広告、単発ＰＲ広告も募集
しています。ご希望の方はＪＩＡ事務局まで

※広告の詳細についてはお邪魔してご説明します。

*ARCHITECT*編集部

編集後記

●近所にマンションの建設が計画された。「また大きなものができて、しゃぐらくなる」と騒いでいた老人たちも、高さ5階と聞いて、老人会の集まりなどで議論した結果、「今日びは、5階ぐらいならほかにも建っとることだで、我慢しなきゃいかんらしい」ということに落ち着いていった。どうもそうなっていった背景には、建築主とともに設計事務所の所長が近隣住民に了解を求めてあいさつして歩いたという経緯があってのことらしい。なんでもなかなか感じのいい男で腰が低かったという。

●感じだけではなく、建築主が採算上、8階を建てたいと強く求めたのに対して、近隣住民のことを考えて5階におさえるように建築主に譲歩してもらった、とあいさつの折りに説明していったそうだ。ちょっと芝居がかっている感じがしないではないが、住民にとっては、設計事務所の所長とは力がある人と映ったようである。その上、周辺の環境まで配慮する良識のある人という採点になったらしい。この町内ではマンションの建設はすでに、いくつかなされているが、こうしたかたちで設計事務所の所長があいさつにまわったというのははじめてのことである。

●静岡では静岡における建築家の草わけ中村与資平の業績をとりあげ、シンポジウム、展覧会などの行事を計画しているそうである。

中村与資平の作品として残されているのは静岡市庁舎、豊橋市庁舎などがあり、中村与資平は名古屋における鈴木禎次のような存在であった。中村与資平の業績を掘起こし評価するという仕事は、建築家の仕事を評価し掘起すことである。本誌に「職業としての建築家」を執筆している瀬口哲夫氏はかねてから鈴木禎次（旧制名高工教授）の仕事を掘起こし、名古屋都心部における鈴木禎次設計の作品を復元し、模型をつくったらどうかと提言している。松坂屋をはじめ、作品は多く名古屋昭和初期の街の復元ともなる。注目に値する提案である。

●都市デザインセミナーも11月にむけて正式に名乗りをあげた。建築、建築家という言葉が活字、電波を通じて市民にひんぱんに届けられることになる。要は、建築家の誠実な業務が、話題性をともなって市民にいかに知られていくかであろう。

ARCHITECT
第6号
発行日　1989・3・1（毎月1回発行）
定価　３８０円
発行所　社団法人 新日本建築家協会
東海・北陸支部愛知部会
発行責任者　栢本良三
編集責任者　森　鉦一
編集　愛知部会ブリテン委員会
建築ジャーナル
名古屋市中区栄四丁目3番26号
昭和ビル5階
TEL (052)263-4636 FAX 251-8495